The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	有翼円盤と有翼人面牡牛像
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 2006, 32, p. 123-164
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79967
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学論集第32号（2005年）

有翼円盤と有翼人面牡牛像

井　本　英　一

The Winged Disc and the Winged Bull with a Human Face

IMOTO Eiichi

In the ancient world a man would die covered with the skin of an animal only with his face exposed from the skin. Or, a man would die with only the mask of an animal head and a human body.

People at that time thought that the man passed away into the world of the ancestors and each ancestor took each animal figure. Totem animals would come to the world of the human beings when the seasons changed to help give them strength to live.

野村純一国学院大学名誉教授から新著『江戸東京の噂話 「こんな晩」から「口裂け女」まで』（大修館書店，2005年）を頂戴した。その第4章「変貌する都市型妖怪」の第1節に「未来を予言する<件（くだん）>」の項を見出し，60数年前を思い出した。

当時私は神戸市の小学校の5年生か6年生で，支那事変と大東亜戦争の戦時下で学校生活を送った。戦争は中学2年生のとき終わった。小学校のとき，仲良しの友人がいたが，この友人が件（くだん）のことを教えてくれた。件は牛の頭の付いた人間で，そのことばには嘘がない。そこで証文の最後に「依って件の如し」と書くのだということであった。友人は周囲の大人たちの会話を耳にし，理解したことがらを私に教えてくれたのだと思う。彼とは同じ中学校に進んだが，途中で姓が変わり学校にも出なくなった。この文章を書くにあたり，同窓会に問い合わせてみたが，音信不通で消息不明とのことであった。件のことは，ときどき思い出すことがあり，辞書を引いてはみたが，人牛合体の生き物に関しては見付けることはできなかった。クダンというのは，証文の条文（くだり）の転訛したものとあるが，これが正しいであろう。「依って件の如し」はこれで解決する。クダンという生き物は漢字の世界にはない。クダンを件で表わしたのはもっぱら日本の当て字である。

キリスト教徒の教会用語の1つにアーメンということばがある。ヘブライ語の動詞アーマン「確める」から派生した副詞アーメーンに由来し，「まことに」の意味を持つ。ユダヤ教では，神のことばを聞いたとき，それが祝福であれ呪詛であっても，「かくあれかし」の意味で用いられる。モーセはレビ人の祭官を通じてイスラエルの民に神のことばを告げ

た。職人の手によってつくられた偶像は主のいとわれるものである。これをつくり，ひそかに安置する者は呪われる。民はみなアーメンといわなければならない（「申命記」27.15）。このあと父母を軽んずる者，隣人との境界石を動かす者，盲人を道に迷わせる者，寄留者・孤児・寡婦の権利をゆがめる者，動物と寝る者，近親者と寝る者，殺人者は呪われる。民はみなアーメンといわなければならない。この律法のことばを守り行わない者は呪われる。民はみなアーメンといわなければならない（同，17.16－26）。

前3世紀の『七十人訳』では，アーメンは「かくあれかし」の意味だけで用いられた。ヘレニズム時代の思想には，ヘブライの思想と古代ペルシアの思想が溶け込んでいる。一方，古代ペルシア思想にはヘブライ・ヘレニズム思想が深い影響を及ぼしている。中期ペルシア語は，語形の上から見ると前3世紀から始まる。ペルシアでは，アフラマズダー（オフルマズド）神のことばや王のことばを受けたとき，それに応える臣民のことばは，同じように「かくあれかし」（エートーン・バヴェート）であった。このことばは，2度繰り返された。『旧約聖書』の「詩篇」は5巻に分かれているが，そのうち3巻の末尾はアーメン・アーメンと反復される（41.13，72.19，89.52）。『新約聖書』では，ユダヤ教にはなかったことであるがアーメンのことばはイエスのことばの冒頭に出る。ことに「ヨハネ福音書」ではアーメン・アーメンの反復型が用いられる。ユダヤ教，キリスト教では，アーメンは祭儀で用いられることばであった。中期ペルシア語（パハラヴィー語）の「かくあれかし」も神のことばや神との契約に対して用いられた。予言する力を持った神やその神の力を預かって伝える預言者が用いたのが「まことに」や「かくあれかし」であった。人知ではははかり知れない向こうがわの世界に関することがらであった。

小学校時代の友人が私に教えてくれた件（くだん）は，このような予言の力を持った人牛であった。件のいうことは真実でうそいつわりはなかった。証文の末尾に，依って件の如しと書いてあるからには，証文どおりで，うそいつわりがないことを確言するものであった。野村は前掲書で岡山県出身の内田百間の『冥途』を引いている。それは百間が件という奇態な動物になってしまった妙な物語である。百間は広い原の真ん中に立っている。体がびっしょり濡れて，尻尾の先から雫が垂れている。件の話は子供のとき聞いたことはあるが，自分がその件になろうとは思いもよらなかった。やがて夜が明け，件は生まれて3日して死に，その間に人間のことばで未来の凶福を予言すると人から聞いたことを思い出した（106－7頁）。

新バビロニア王ネブカドネツァルは何度も夢を見て不安になり，多くの賢者を呼び出し，その夢が何であったかいい当て，その夢の解き明かしを求めた。賢者たちは王にアラム語で答えた（「ダニエル書」2.1－4 a）。このあと2.4bから7.28まで，ヘブライ語ではなく，聖書アラム語のテキストになる。聖書アラム語は，西はエジプトのナイル川上流のアスワン（古代のシュエネー。西陽城として中国人に知られた都市）から東はアフガニスタンに至る広大な地域において記録を残す帝国アラム語の1つである。古代ペルシアの統治版図は，ナイル川からインダス川までで，統治のための公用語はアラム語であった。記録が見あたらないはるか東方に至るまで，アラム語は諸民族間の国際語として用いられた。

アラム語が国際語の舞台から退場したあと，イラン系の諸言語，ことにペルシア語が国際語の役割を果たした。13 世紀のマルコ・ポーロはペルシア語を使ってアジア大陸を横断した。

ネブカドネツァル 2 世（在位前 604－562）は，前 597 年と前 587 年の 2 度にわたりエルサレムを攻略し，王エホヤキンとエホヤキムを捕え数千人のユダヤ人と共に捕囚としてバビロンに連行した。前 539 年ペルシア帝国のキュロス大王に解放されるまで，ユダヤ人はバビロンで幽囚の生活を送ったが，ペルシア人からマズダ教（聖書『アヴェスタ』に結集される前のゾロアスター教）の救世主の観念を学んだ。救世主ということばは『旧約聖書』には現れない。「油塗られた者」を表わすヘブライ語･アラム語をギリシア語で表わしたメシアが用いられる。他の個所「祖先柱考」で述べたように，再生復活の儀礼では，トーテム獣の生ま皮を被った。儀礼の実修者は元来は衣服を着けていないので，身体一面が脂と血液でべとべとになる。生ま皮を被ったあと，実修者はトーテムの世界に参入し再生する。再生儀礼を実施する者は，儀礼を受ける者が死者であれ成人式のような入門式に臨む生者であれ，自らも身体じゅうを脂と血で塗りたくる。油を塗って聖化する原義はここにあり，自他共に再生することを意味した。

イエスが救世主キリストとされた背景にはこのようなことがあった。ギリシア語クリストスはヘブライ語マーシーアハの訳語で，「油塗られた者」の意である。ギリシア語ではメシアスとそのまま音訳されても用いられる。ローマには，キリスト教成立以前からエジプトの母子神であるイシスとオシリスの信仰とイランのミトラとその母神アナーヒターの信仰が流入していた。イエスの誕生日を冬至にしたのはミトラス（ミトラのラテン語形）の誕生日である冬至を採用したものである。古代西アジアでは年 1 回の男女の交会がイシュタル女神（アナーヒター女神，聖母マリアと同系の女神）の神殿で行われた。受胎した女子は在胎期間である 280 日後の冬至に神の子を出産した。ミトラ（ミフラ，ミスラ）の愛称はミトラカ（ミフラク，ミスラク）であったが，この語が仏教に採用されて弥勒（みろく）と表記された。弥勒はミフラクを漢字で写したもので，サンスクリットのマーイトレーヤを写音したものではない。仏教では，弥勒は釈尊の死後 56 億 7000 万年後，兜率天（とそつてん）から降りてきて衆生（しゅじょう）を救う。このように，紀元前の時代に，ミトラカ，ミフラク，ミトラス，弥勒がユーラシア全域にわたって信仰の対象になり，救世主の観念が発展したことが明らかになった。救世主の観念はイランのイスラム教シーア派にも伝承された。12 イマーム・シーア派では，12 代目のイマーム，ムハンマド・アルムンタザル（待ちのぞまれるムハンマド）はマハディー（神に導かれた者）として幼児の状態のまま，父ハサン・アルアスカリーの死後，井戸の中に隠れる。マハディーはイランに不正と暴虐がはびこったとき，救世主としてこの世に出現することを待望されている。イスラム教はユダヤ教とキリストスト教から多くの宗教的観念を継承したが，この救世主の観念はゾロアスター教の土壌であるイランで本来育成された観念であるので，ミトラのような幼児の姿で殺害される伝統が，キリスト教に入ったミトラス信仰と共に生きているのであろう。

ネブカドネツァルの求めに対し，賢者たちはそのようなことは神以外できることではな

いと答えた。王は怒ってバビロンの知者を皆殺しにするよう命じた。侍従長は捕囚の１人であったダニエルを王のもとに連れてゆき，王の夢の解き明かしをさせると言上した。ダニエルは，王の見た夢が王の王国の滅亡を予言し，王は人間の社会から追放されて，野の獣と共に住み，牛のように草を食い，その体は天の露に濡れ，その毛は鷲の羽のように，爪は鳥の爪のように生え伸びる（2.10 － 4.30）と答えた。ダニエルは，ネブカドネツァル王がユダヤの神とユダヤの民に対して行った不法に対して神の怒りがこのような結末を招くことを強調する。王は有翼牛で恐らく人面の合成獣人として野原を放浪すると解釈された。この獣人は明らかに蔑視された。

同じようにエホヤキン王と共にバビロンに連行された捕囚の中にエゼキエルがいた。エゼキエルは幻視した。大風が吹いて火を発し，火の中に琥珀金の輝きがあり，その中に４つの生き物の姿があった。彼らは人間のようなもので，それぞれが４つの顔を持ち４つの翼を持っていた。足の裏は子牛の足の裏に似ていた。翼の下には４つの方向に人間の手が出ていた。それぞれの生き物は４つの顔を持っており，正面は人間の顔のようで，４つとも右に獅子の顔，左に牛の顔，後ろに鷲の顔を持っていた。これら４つの生き物の頭上にある大空にはサファイアの玉座があり，その上には高く人間のように見える姿をしたものがあった。これは主の栄光の姿の有様であった。エゼキエルはこれを見てひれ伏した(「エゼキエル書」1.1－28)。この描写は玉座の４方を守護する４つの同一の獣人で，その１つに有翼人面，牛面の偶像があった。エゼキエルが見た幻影と同じものを『新約聖書』「ヨハネの黙示録」の中でヨハネ（どのヨハネか不明であるが，ユダヤ教的伝統も保持していると見られる）が見ている。ヨハネは天の門が開かれると天に上った。そこには天の玉座が設けられ，玉座に座っている碧玉や赤めのうのような神格が見られた。玉座の周りには24の座があり，24人の長老が座っていた。玉座の中央と周りには４つの生き物がいたが，前にも後ろにも一面に目がついていた。

第１の生き物は獅子のようであり，第２のそれは若い牡牛のようであり，第３のそれは人間の顔を持ち，第４のそれは空を飛ぶ鷲のようであった。この４つの生き物にはそれぞれ６つの翼があり，その周りにも内がわにも一面に目があった(4.1－８)。ここにも有翼人面牡牛像の原型が見られる。これらの獣人が，エゼキエルが見た玉座の周辺にある獣人と同じように，天上の門の所にある玉座の周囲にいたことが分かる。玉座は神を祭る祭壇で，門の敷居そのものであった。内田百間は，何の影もない広野の中で，身体が牛で顔だけが人間の浅ましい化け物に生まれてぼんやり立っている自分を幻視している。「ダニエル書」に出ているダニエルの透視に現れるネブカドネツァルの未来像と似ている。エゼキエルやヨハネの幻視像とはやや径庭がある。百鬼園がダニエルの故事の影響を受けたとは考えにくい。自分が子供のときに聞いた件になろうとは思いもよらなかったと慨嘆している。子供のときに件について聞いているので，それが土台となって幻視したのであろうが，意識下の元型が現れたと考えられる。

シルクロード関係の多く著作があり，登呂遺跡発見の第１報を世に送った元毎日新聞記者森（もり）　豊（ゆたか）の『シルクロードの天馬』（六興出版，1979年）に，翼を持つ聖なる獣たちは，

古くは獅子であり，牡牛であり，鷲であり，そして羊も翼を持った（157頁）とある。森の分析と総合の結果が簡潔に述べられている。エゼキエルやヨハネの幻視には羊は現れない。羊は従順な家畜で飼育し易い富の象徴であったが，獰猛さに欠けていたので入り口の守護獣の中に入らなかったのかも知れない。エゼキエルの幻視では，入り口の祭壇の有翼人面獣が見られたが，この有翼像と対称的に無翼の像があり，有翼と無翼の像が1対として存在価値を持った。日本に伝わる件は，人面で牛の体をしているが，有翼の件は見ない。有翼獣人像は，人間と空飛ぶ鳥，地を走る獣の合体であり，人とトーテムである鳥獣の合体によって全体性を回復することになる。無翼像は空飛ぶ鳥との合体が未完で，有翼像と対になることによって死と生の対概念を構成する。百間は幻視の中で，自分のみすぼらしい姿を嘆いているが，件は化け物ではなく，おめでたい存在であった。

野村，前掲書は，天保7年（1836），丹波国に件が現れたという瓦版の写真を掲げる。それには，件は大豊作をしらす獣であるとした上で，この絵図を張っておくと家内繁盛して厄病を受けず，一切の禍をまぬがれ大豊作となり，誠にめでたい獣であると断っている。この瓦版には，宝永2年（1705）12月にも件が現れたとある（108頁）。件は100年に1回しか現れない瑞獣で，俗信では生まれて3年間ものをいわないが，3年の終わりに世の変異を予言して死ぬとされる。私が小学校時代，友人から教えられた件も戦局の変遷の予言をし，そのことばは間違いなく実現するというものであった。野村，前掲書は，第2次世界大戦末期に件が出現し，戦争の終局が近いという噂を流したので，内務省の保安課は流言蜚語にまどわされないよう『思想旬報』で警告したと述べている（112頁）。前掲の瓦版を見ると，件は天保7年にも宝永2年にも12月に出現している。新しい年の直前である12月に出現することに意義がある。件が現れたというが，瓦版に載った件の絵を見ると，人面も牛体も成熟した個体である。赤ん坊の件ではない。しかし年末に出現する伝承は何をいおうとしているのであろうか。日本の12月は旧暦の12月であるので，太陽暦の1月ごろに当たる。

ヘロドトスはバビロンの聖婚を次のように伝えている。この国の女は，一生に1度はアプロディテ（ヴィーナス）の社内に座って見知らぬ男と交わらねばならなかった。無数の女たちが頭の周りに紐を冠のように巻いて座っていた。男たちは綱で仕切られた通路を通って女を物色した。男が気に入った女の膝に銭を投げると女は拒むことなく男に従い，社の外で男と交わった。男と交われば，女は女神に対する奉仕を果たしたことになり家に帰った（『歴史』1.199）。このバビロンの一夜婚は春分に行われた。社に参拝する男は1人ひとりが祖先神の化身と見なされた。春分に大挙してこの世にやってくる祖先神を演じるのがこれらの男であった。この一夜婚で受胎した女は，40週280日のあと出産した。カトリックでは3月25日を受胎告知日，12月25日を聖誕日として伝承している。太陽暦の12月下旬に神の子が誕生する。太陰太陽暦では月名だけが移行したが，神の子の誕生も同時に年末に移行した。牛の在胎期間は285日で，人間のそれとほとんど変わらない。牛は春分の交尾のあと冬至に子牛を出産することを古代人は経験的に知っていた。

ヘロドトスによると，エジプトにはきわめて永い間隔をおいてしか出現しないアピスと

いう聖牛がいた。この神はオシリス神の化身と考えられていた。オシリスはエジプトの穀霊で，イシス女神と対になる神である。アッティスとキュベレ，ミトラ（ミスラ）とアナーヒター，アドニスとアプロディテ，イエスとマリアも同じ系列の穀霊とその母神で母子神の形態もとった。この聖牛は，1度出産した後は再び受胎することができない（牡牛から厳重に隔離された）牝牛から生まれた子牛で，エジプト人のいい伝えでは，天上から光がこの牝牛に降り，牛はこの光によって受胎してアピスを生むという。この牛は黒牛であるが，眉間に四角い白い斑点があり，背には鷲の翼の形をした模様が浮き出て，尾は黒白の毛が生え，舌の裏には甲虫（スカラベ）のような形をした肉の塊りがついていた。

アピスの身体的特徴はヘロドトスの記述だけでも揺れている。アピスは一方では黒牛とされ，他方では黒白まだらの牛とされる。他の個所では，アピス牛を検査するとき，1本でも黒い毛が検査官の目にとまると，その牛は不浄のものと認められる（2.38）という。ヘロドトス『歴史』（筑摩書房，1967年）の訳者松平千秋の注（83頁）は「不浄」と訳すのは不適当かも知れないという。W.W. ハウ＆J. ウェルズ『ヘロドトス注釈』（1，オックスフォード，1912年）によると，黒い毛の牛はオシリスに供犠される牛であるので，一般の犠牲にしないという意味で，不浄は聖性を帯びた穢れのことである（184頁）。アピス牛はその変容が極東にも見られる。B.H. チェンバレンが『日本事物誌』（1，高梨健吉訳，東洋文庫，1969年＜原書第6版1936＞）の中でそれを伝えている。明治30年（1897）皇太后が亡くなったとき，牛車（ぎっしゃ）がすばらしい棺を運んだ。その中には亡骸（なきがら）が朱の寝床の中に薫らせて横たわっていた。3匹の牡牛が一列に引き具をつけられてそれを引いた。先頭は真っ黒の牛で，2番目は黒い斑点のある焦げ茶色で，3番目は黒白まだらで額に白星があり，4本の脚に白足袋（ソックス）をはいていた。すべてこれは古来の慣習に従うものであった。墓を掘る人びとは黒い翼を持つ鳥のような服装をしていた。その理由は，鳥は理性がないので，皇太后の墓を啄んでも少しも神聖を穢したことにならないのである。明治45年（1912）の明治天皇の葬儀においても全く同じ儀式が行われた。大正15年（1925）の大正天皇の場合も同様であった（258－9頁）。

この葬法は古代中国の周の葬法に依ったもので，周が中央アジアから中原にもたらした礼制であると考えられる。エジプトのアピス牛が具えていた特徴が牛車を引く3匹の牛の中に見られる。真っ黒な牛，黒白まだらの牛，額の白星がこれで，茶と黒のまだらも特徴の1つである。有翼の表象は墓を掘る人の衣服に見られる。この特徴は，現代中国の墓掘り人の服装にもうかがうことができる。現代では紺の衣服に翼文様のある補子をつけている。アピス牛は舌の裏にスカラベのような肉の塊りをつけていた。チェンバレンの記述にはこれに類するものが見当たらないが，中国では含蟬といって，玉で彫った長さ3－4センチの蟬形を死者の舌の下に入れる。以前にこれに関して論じたが，ギリシアや日本では銭，イランではイスラム・シーア派聖者5名の名前を刻んだ瑪瑙を入れる。スカラベや蟬は地中から生まれ出てくるので，死者はそれにあやかったのであろう。銭や瑪瑙はおそらく改新形であろう。イランでは今でも畑を耕していると，地母神像やこれらのものが出土する。土産店で扱う現代の製品より，出土物の方がよいと見え，死者の口には骨董店で

買った古いものを入れてやる。

件は，野村，前掲書にある江戸の瓦版の絵で明らかなように黒牛である。人面と２本の角は白い。エジプトのアピスが黒牛で額に白い星があるのと通じる。久し振りに出現したアピスを祝って，エジプト人は一張羅の衣裳をつけて祝宴を催した（ヘロドトス，3.27)。アピスは穀霊オシリスに供犠されるオシリスの他我であった。オシリスは供犠される他我の血液と肉によって活性を取り戻し，エジプト全土に豊穣が訪れ栄えるとされた。人びとが一張羅の晴れ着を着てお祝いしたのはそのためであった。エジプトを遠征したペルシア帝国のカンビュセス王は，メンピスでこの光景に遭遇した。王は神殿の中でアピスの股を切って殺害したが，祭司たちはひそかに牛を葬った。同時に祝祭の参加者を数多く殺害し，祭りを中止させた。王はこの悪業の祟りで発狂した（3.27 － 30)。のちに王は馬上でアピスを刺した同じ股の個所を突き刺し重傷を負った。やがて骨が腐りだし腿には急速に壊疽（えそ）が進んでカンビュセス王は亡くなった（3.64 － 6)。

アピス聖牛をオシリス神に供犠する方法は頸部を切るのではなく，後の腿の動脈を切開し血を抜いたあと，左脚から皮を剥ぎ，順次解体したのではないかと思う。日本神話ではスサノヲノミコトが天の斑駒を逆剥ぎにして，忌服殿（いむはたどの）の屋根に穴を開け，下で機を織っている天照大神にその皮を投げた。解体する前に牛の頭部を切り取り，異邦人である海の向こうのギリシア人商人がいる場合は市場にその首をもっていって彼に売り，ギリシア商人がいない場合はナイル川に捨てた。エジプトでは牛以外の動物でもその首を食用にする者が１人もいないのはこの風習からきている（2.39)。ギリシア人はエジプト在住でも，海の向こうの人で異界の人であったので全てがあべこべの世界の人であった。牛の頭は１頭に１つないし２つしかない部位が多く，珍重されたと思う。ヘロドトスは，アピスの首についてエジプト人はギリシア人商人がいないときはナイル川に捨てたというが，古代人のいだいた聖性と穢れを理解する場合，日本でいう祓いの思想に１部が近いものと考えられる。エジプト人は犠牲獣ことにアピスの首に触れることを極端にはばかったのである。

ヘロドトスはいう。豚はエジプトでは穢れた動物と考えられている。エジプト人は通りすがりに豚に触れるようなことがあると，着物を着たままナイル川に飛び込んですっかり体を漬けてしまう。エジプト人は豚飼いだけはどの神殿にも入ることができなかった。豚飼いは同業者どうしの間で婚姻を結んだ。エジプト人はオシリスとその妻イシスの祭日である満月の日に豚を供犠してその肉を食べる。しかし日が変わるともはや口にしない。貧しい人たちは，粉を捏ねて豚の形につくり，これを炙って神に供える。オシリス祭の前夜，エジプト人はそれぞれの家の前で子豚を屠って神に捧げ，その子豚はそれを売った豚飼いに持って帰らせる（2.47 － 8)。

ヘロドトスのいう満月の日は毎月くるので，オシリスに捧げるアピスの祭りとは異なっていた。アピスはオシリスの他我であり祖先獣であった。豚もオシリスとイシスの祖先獣であった。牡牛と豚がそれぞれ祖先獣と見なされるようになったのは，恐らくは時代的に新旧の差があり，同一時期のものではないと考えられる。穀霊である豚をディオニュソスの祭りのときだけ食べるのはヘロドトスの言によればギリシアでも行われた。ユダヤ教や

イスラム教では豚肉はタブーであるが，古い時代には，年に1度あるいは毎月1度，祖先を食べる儀式を行っていたかも知れない。一神教の発展成立の結果，儀礼が廃れ豚肉は全く口にされなくなったのであろう。豚を穀霊と見る習俗も廃れ，豚は単なる不浄の動物と見なされるようになった。満月の日のイシスとオシリスの祭りでは，供犠された豚の頭は別置されて祭られ，祭りのあとはナイル川に流されてあの世に送られたのであろう。豚の頭はアピスの頭と同様，川に投入してあの世の神に供えたのである。アピスの頭はあの世の人であるギリシア人がいる場合，彼に与えた。現在は羊を供犠するが，羊の頭は別置する。羊肉店では羊頭が看板代わりに店頭に並べられる。中国に「羊頭を掲げて狗肉を売る」ということばがある。ここでは羊頭は羊肉店の看板である。中国に多い狗肉店には羊頭は掲げられてない。多くの文化で，来訪者である客人にご馳走として羊の頭を出す。これは来訪者を神と見なしてもてなした時代の作法の名残りである。

中国安陽の侯家荘で発掘された殷時代の犠牲坑からは形質の異なった，当時の殷と関係を持った人種，民族の頭骨が身体から切り離された状態で出土する。頭骨は各々の坑に5－6個ないし10個埋納されている（李済『安陽発掘』国分直一訳，新日本教育図書，1982年，115頁以下，305頁以下，＜Anyang by Li Ci, Washington Univ. Press, 1977の英文タイプ草稿＞）。これら多数の頭骨はエジプトのアピス聖牛の頭部と同じもので，侯家荘に葬られた王や小王あるいは貴顕の遺体を守護するためだけのものではなく，宇宙全体のエネルギーを死体に注ぎ，全体性を回復することを目的としたと考えられる。形質的に異なった5種類の人種の頭骨が析出されるという。それらの人物は，身分の上下を問わない人物，捕虜，奴隷，囚人など，さまざまな人物が考えられるが，彼らの頭部には被葬者を活気づける普遍的な霊魂が宿っており，それが放出されると殷人は考えていたに違いない。アピス牛の額に白い星があること，その首がナイル川に流されたことの背景を述べた。アピスは永い年月を経て神の子として出現し，エジプトの繁栄を予祝し，エネルギーを内蔵した首は，異界のギリシア人商人の手に渡るか，川に流されて異界に送られた。

白川静『字統』（平凡社，1984年）にいう。法という文字は，廌（たい）と去と水とに従う。廌は神判に用いる神羊で，獬廌とよばれるもの。去は大と凵とに従い，大はその神判に敗れた者の正面形。凵はその審判のとき，自己詛盟をして誓った盟誓を入れた器の形である凵（さい）の蓋を取り去った形。詛盟に虚偽があったとして蓋を去り破棄する意を示す。法とは敗訴者と破棄された盟誓とを敗訴者の提供した神羊と共に水に投棄することを示す字である。投棄するとき，これを鴟夷という馬の皮のような大きな獣皮に包んで投棄した（785－6頁）。これが刑であり法であった。呉王夫差に会稽（かいけい）山で破った越王句踐（こうせん）を殺すよう進言した伍子胥は自殺した。その死体は鴟夷に包んで海に投棄された。死体を獣皮で包むことは，刑罰に使われるようになる以前は，トーテムの世界に帰る死者をあの世で再生させる処置であった。このことは「獣皮の禁忌」で論じた。「廌」は白川，前掲書によると神判に用いる獣の形で，『説文』に「山牛に似て1角。古は訟（しょう）を決むるとき，不直なる者に触れしむ」とあり『玉篇』には「牛に似て1角」につくる。この獣の側面形は豸（ち）で廌と同声，古い牛神判は羊神判に移行する。神判に用いる神羊に解豸とよばれるものがあり，『爾雅』に

「足なきを豸という」とある。のちに法官が用いた法服の冠に獬豸冠があると伝えられたが，その形態はよく知られていない（564，567－8頁）。

神羊の古い形である1角の山牛は，訴訟に敗れた者はそれに触れなければならなかった。不直な者が神羊に触れるとその穢れが羊の中に移り，羊は水に流されたのであろう。敗れた者は法によって刑せられたと考えられる。敗れた者は羊に触れることで羊のエネルギーを受け正常に戻る場合もあったであろう。ヘロドトスが伝える所では，エジプト人はイシスの聖獣である豚に道で衣服が触れるだけで，ナイル川に飛び込んで体じゅう水に漬かった。敗訴者が神羊に触れ，その羊が水に流されたので表裏何らかの関係があると考えられる。一角獣が神聖なものに数えられるのは東西いずれの世界でもあるが，ナイル川に流されたアピス牛の額の星がこれに当たった。チェンバレンが伝える御大葬の棺を引く3頭の中の黒白まだらの牛にも星があったと考えられるが，これが再生の象徴である聖角であった。

神羊，おそらくより古くは神牛に解豸あるいは獬豸がいた。『爾雅』は豸には足がないという。『論衡』に「獬豸は1角の羊なり。性，罪ある者を識る。皋陶（こうよう）（古の理官）獄を治めしとき，罪ある者には羊をしてこれに触れしむ」とある（白川，前掲書，96頁）。「解」の字は角と刀と牛とに従う。刀で牛角を解く形で，『説文』に「判（わか）つなり」という。さらに獣体を解くの意となる（93頁）。アピス牛は供犠されるとき首を切断され解体されたのであるが，獬という神獣にアピス聖牛を見ることができる。

チェンバレン，前掲書で御大葬の棺を引く黒白まだらの牛は4本の脚に白足袋をはいていた。日本の俗信に四つ目の犬がある。四つ目の犬というのは，大きいこげ茶色の眉のある犬のことで，インドやイランその他の宗教史に出てくる犬である。ギリシア神話の地獄の番犬である胴体が1つで頸と頭が2つあるケルベロス犬もこれと同系の犬で，かつてこれに関連して説べたことがある。この四つ目の犬は，この世とあの世の中間にいる（黄と白の）まだらの犬であるが，葬列の先導犬として用いられた習俗があるので忌まれる。四つ目の犬は，さらに，4つの脚の何本かあるいは全部，脚先に白毛の生えたものが殊のほか忌まれる。この種の犬は白足袋をはいているといわれる。まだらの牛とまだらの犬の両方にこのような禁忌が見られる。イランにもこの習俗があった。ペルシア人は右の前脚と後の両脚の白い馬をチャップといい忌み嫌った。またペルシア語でアブラクというまだらの馬も嫌う。アブラクとは，馬の鼻，目のまわり，尻尾のつけ根にある白い鱗（うろこ）状の斑点をいう（J. モーリア『ハジババの冒険』1，岡崎正孝，江浦公治，高橋和夫訳，東洋文庫，1984年，242頁。A・J. ハーンサーリー，サーデク・ヘダーヤト『ペルシア民俗誌』岡田恵美子，奥西峻介訳，東洋文庫，1999年，252頁）。馬の額から鼻にかけて白い星のあるものは，エジプトのアピス牛と同じように，本来は極めて聖性の強いものであった。1997年9月6日，英国皇太子元妃ダイアナの遺体を納めた棺を陸軍の砲車に載せて引く6頭の馬は全て黒毛で，脚はいわゆる白足袋をはいていた。イランにも似たような習俗があることは前述したとおりであるが，イランでは前掲書のいずれもが，4脚のうち3脚（の足もと）が白い馬を不吉とする。イランでも，かつてはこのような馬が四つ目の犬と同じように野辺送

りに使われ死者を運んだのであろう。

御大葬の棺を引く3頭の牛は，真っ黒な牛，黒い斑点のあるこげ茶の牛，黒白まだらの牛であった。3番目の黒白まだらの牛が遺体にいちばん近い牛で，意味的には再生に関係する牛であった。2番目と3番目の牛はまだら牛で「物」といわれ，単色の牛と区別された。物とよばれたまだら牛は境界の存在で，御大葬のときの先頭の真っ黒な牛は死そのものの表象であった。死体が腐敗酸化して黒くなった状態や，埋葬墓地から掘り出され，地上に安置された死体がものの30分で黒く変色する状態を古代の人びとは経験してよく知っていた。真っ黒な牛は，この地上における死の表象であった。2番目のこげ茶に黒の斑点のある牛は現世とあの世の境界に入った牛で，黒白まだらの牛はさらに踏み込んだ，再生を表象する牛であった。この牛に限って白い足袋をはいていた。英国のダイアナ元妃の棺を引く黒馬は6頭とも足もとに白足袋をはいていた。他の文化にも見られるこれらの白足袋や足もとの白い毛は何であったのか考えてみたい。

足もとに白足袋をはかせたり，自然の白毛をつけている牛や馬は，大地と直接接触することを避けることができた。同一の個体でも，4脚のうち3脚のみ白足袋をはいている場合は，残りの1脚は大地に接触することになる。柳田国男「肩車考」『小さき者の声』（『定本　柳田国男集』第20巻，筑摩書房）にいう。祭りでは子供を参拝に連れてゆくとき，大人の肩に乗せてゆく肩車や手車のやり方がある。関西ではカタクルマあるいはカタクマのことばがあった。カタクマはカタクルマの訛りではなく，肩駒の訛りで，稚児を馬に乗せ，足を大地につけさせないようにした。日本には神は足を大地につけないという信念があり，天皇や祭神の足が地につくタブーとして語り継がれている。洋の東西を問わず，幽霊には足がない。前述の獬豸に脚がないという伝承と関係がある。G.J. フレイザーは，エネルギーの高い人が大地に触れると，そのエネルギーが大地に吸い取られる。それは高い電位が大地に放電されるのと同じであると説明する（400－15頁）。イランのシーア派イスラム教徒が行うイスラム暦1月10日のアーシューラーの行列では，稚児に当る3代目イマームであるホセインの幼児は白装束で台車に乗るか，あるいは屈強な男の肩に乗って進む。別の場面では，行列の先頭を高さ3メートルほどの棒の天辺に，水を入れた皮袋をもった少年を乗せ，これも屈強な男が運んでゆく。祭礼に参加する子供は神の子としてこの世に生まれ出た者とされ，そのときは，足を地につけることができないとされたのである。祭りのあとは，普通の生活をした（H. マセ「ペルシア人の信仰と習俗」田中栄一訳，『えとのす』16，新日本教育図書株式会社，1981年，111－27頁）。

ミッシェル・カプランは「聖者伝資料に見られるビザンツ社会の空間と聖性」（大月康弘訳，『オリエント』46－2，日本オリエント学会，2003年）の中で，ビザンツの聖地における柱頭行者について論じている。柱頭行者というのは，それ以前から聖性のある地に柱――ときに高さが18メートルもあった――を建て，柱の頂上に屋根のない部屋をつくり，その中で修行をする聖者のことであった。部屋には1つあるいは2つの窓がついていて，梯子を上ってくる外の者と連絡がとれた。柱の周囲の空間にはマンドラという壁が築かれ，壁には錠のついた扉が設けられた。初期はマンドラと柱のある場所の傍らには修道院

が建てられたが，後期になると修道院の敷地内にマンドラと柱が建てられ，聖者が柱頭の小部屋で修行するようになった。いずれの場合もこれらの聖域では柱は聖者と等しいものと考えられ，もっとも神聖なものであった。聖者が臨終を迎えると，多くの人がマンドラに集まり聖者の死を見守った。聖者の死体は抱いて下ろされた（225 － 44 頁）。

カプランはビザンツと中世中東の歴史と文明の研究者である。柱頭行者は，カプランは言及していないが，大地に足を触れるのを避けるため死ぬまで柱上で生活したのであろう。柱は「祖先柱考」で論じたように，祖先（獣）の柱で，聖者はトーテムと常にあることで修行して聖性を保ちつづけることができた。エジプトの神殿の柱には，柱頭や柱の中間に死せる王の顔を彫刻したものがある。エジプト王は 30 年ごとに行うセド祭で即位式を更新して行ったが，そのときこの種の柱を建てた。柱頭行者は祖先柱の上で修行し，大地に足を触れることなく生を終えた。大地は聖性の強い聖地であったが，足を地に着けると聖者の聖性は大地に吸い取られると考えられたのであろう。

柱頭行者の小部屋には屋根がなかった。柱と小部屋の複合には初期には覆い屋に当るものはなかった。後期には聖堂の傍らや聖堂の中に柱を取り込む様式が発達したようであるが，これでは天との接触が絶たれ，行者の聖性の蓄積ができなくなる。雨風と寒暑は小部屋の中で凌いだのであろう。ローマのヴァティカンにある聖ピエトロ大聖堂のドームの頂上は丸く空いたままになっている。天井や屋根があると聖性が保持できないからである。カプランは20世紀前半中葉に出現したアナール派の研究方法から脱し，新しい地域研究の方法をうち立てたので，旧派の成果には興味がなかったと思える。比較文化学の視点からすれば，聖なる者は裸足で大地に触れてはならないのである。さらに天からエネルギーを吸収するために屋根と天井はあってはならなかったのである。

J.G. フレイザー『金枝篇』第 3 部『死にゆく神』（ロンドン，1911 年）にいう。19 世紀までタイ国ではタイ暦 6 月 6 日（現行 4 月下旬）3 日間の仮の王が任命された。仮の王はこの期間あらゆる王の特権を享受できた。本物の王はこの間，王宮の中に閉じこもっていた。仮の王は首都の真ん中で，はでに着飾った牛たちに金箔を貼った犂を曳かせる模擬農耕を演じる。そのあと，牛たちはくびきを解かれ，コメ，トウモロコシ，ゴマ，サゴ，バナナ，サトウキビ，メロンその他が牛の前に置かれる。牛が食べた最初のものが，その年の高価な作物になる。人によっては，正反対に解釈する場合もある。この間，仮の王は 1 本の樹木に左足 1 本で凭りかかり，右足を左足の膝にのせる。彼は「天の万軍の主」という称号をもらった。2 月（寒い季節に当たる）にも 3 日間の仮の王が見られた。彼はヒンズー教神殿の前にある広場への行列に参加した。広場には何本もの多色の布で巻かれた五月柱のような柱が立てられていた。それぞれの柱は 20 数メートルの高さがあった。1 本の柱の上から長い綱が垂れ，1 人の婆羅門祭司がその綱につかまって向かいの柱に飛んでゆき，またその綱につかまって元の柱に戻った。このような婆羅門祭司が何組も見られた。その間，仮の王はその下で白布で覆われ，つづれ織りを敷いた台座の上で 3 時間の間片足で立ったままそれを見上げていた（149－50 頁）。

高い柱の上をサーカスのようにブランコをして空中で乱舞した。婆羅門祭司は綱の下に

座席をつけて往復し，立つ必要はなかった。祭司たちは手に水牛の角を持ち，巨大な青銅の釜に入った水を扱んで彼らを見上げる観衆の上に撒いた。水は神の恩恵を伝えた。祭司たちは3時間の間，大地に足を触れないで空中を浮游した。イランのモハッラム月10日のイマーム・ホセインの追悼行列では，少年が水の入った袋の上に座り，喉の渇いたケルベラの決戦の参加者を癒した。シーア派の殉教行列では，イマーム・ホセインの再生――イスラム的というよりはシリア・ササン的な前イスラム思想の伝承としての――を願う行事の1つとして取り入れられた。聖者の再生や王の再生に対して，足を地に着けない儀礼が本人あるいはその代理人によって行われた。

仮の王は儀礼が行われる3時間の間，台上で片足で立ち，バラモン祭司らの空中乱舞を見上げていた。彼は左足で立ち，右足は左足の膝の上に乗せていた。柱上行者，柱上の神の子，柱上の婆羅門祭司らは，空中にいるので足は完全に大地から隔離していた。これらの柱上の聖者は，いずれも再生儀礼において見られた。タイ王国の仮の王は，毎年の王の生命（王権）の更新の儀礼で出現する死にゆく王の象徴である。仮の王が左足を地に着けるのは彼の死を表わし，右足を大地から隔離するのは彼の再生つまり真の王の再生を象徴したのであろうか。イランでは，前脚2本と後脚1本の足もとに白毛が生えているのをチャプと呼んで殊さら忌み嫌った。チャプは左という意味であるが，左だけは白毛が生えてなかったのであろう。現在はイランをはじめ，イスラム教諸国では，イスラム暦12月8日から10日までの間にメッカに巡礼するとき，死体も飛行機や自働車で運ぶことが多くなった。それにも拘らず，死体を馬の両脇に懸けて，隊商と共にメッカに向かう情景は20世紀後半でも目にすることができた。墓から掘り出した死体を運ぶ場合，風下に臭気が流れるので巡礼の季節には経験する事実である。死体を運ぶ馬やロバの特徴は，古くはまだらで，脚には白毛が生えているものとないものがあったのではないかと思う。古いタブーがあったので，この種の馬は買うときにも売るときにも捨て値で取り引きされた。御大葬では，チェンバレンによると，3番目の黒白まだらの牛は額に白い星があり4本の脚に白足袋をはいていたという。このような星やまだらや白足袋は，死と再生の場面に見られるのであるが，4本脚と3本脚の白足袋のちがいの理由については明確なことはいえない。

イスラム暦（陰暦）12月のメッカ巡暦は，毎年年末に人間を始め宇宙全体が衰弱するので，その再生を目的として神の家に参詣しエネルギーを受けるために行うものである。一度埋葬した死体を掘り出して馬やロバでメッカに運びメッカの地に埋葬し直すのも死と再生の原理に立脚している。ゾロアスター教徒の葬儀では，葬列の先頭を黄と白のまだらで，耳の先に黄の斑点のある四つ目の犬が進む。この四つ目の犬が脚に白毛をつけているかどうかはゾロアスター教の聖書『アヴェスタ』には規定されていないが，死者の魂が乗った犬の1部の脚は白足袋をはいて大地と接触せず，1部は白足袋なしで大地と接触するように考えられていたのではないかと思う。馬の脚にはその名残りが見られるからである。これらの白足袋をはいたり，1部ははかなかったりする馬，牛，犬のような動物は，時間的，空間的な境界に現れるので，全脚に白足袋をはかせる必要はなく，毛並みもまだらになる。

牛と人面の合成像の歴史は古い。マリア・ギンブタス『古ヨーロッパの神々』（鶴岡真弓訳，言叢社，1989年）にいう。ユーゴ・スラヴィア出土の後期ヴィンチャ文化（前4500－4000年）の男性座像の逞しい肩は，牡牛の臀部か角を想わせるし，身体全体を牛の姿で表わすこともよくある。また，人面をつけた牛の胴体の形の男神像もある。牛の胴体に人頭をつなぐことで2種の生き物が共生し，それによって力は最強に達する。人間の知と情熱が牡牛の肉体的な強靭さと精力に混り合う。図170「牛をかたどった祭器」はランプとして用いられたものという。赤地に黒で彩色されている。中央に立っていた円筒は破損している。ギリシア北東部出土，東バルカン文化，前4500年頃の物である（222頁）。古ヨーロッパというのは，著者自身の提案による概念で，前7000年頃から前3500年頃にかけての，南はエーゲ海およびアドリア海とその島々から北はチェコ・スロヴァキア，ポーランド南部，ウクライナ西部にまで及ぶ一帯で，この地域の住民は，それより北方や西方にいた隣人たちよりもはるかに複雑な社会構造を発展させた（前掲書，15頁）。

牛は初期の人類の集団にとって物品の曳行，農耕，食料，皮革などの便益を供給した。牛は温和さと兇暴さを兼ね具えた巨大家畜となった。ギンブタスは人面牡牛は，人間の知性と牡牛の強暴を合成した動物とした。そうではなく，当時の古ヨーロッパではすでに祖先獣の信仰があり，同時に人びとは何らかの祭りの際に牡牛の皮を身にまとって，祖先の世界に参入したのではないかと思う。このランプの牛は，高さ10.6センチ，長さ16.44センチある。背中に円筒があったが破損している。胴の左右にそれぞれ2個所と鼻と尾に紐を通す孔がついている。吊り下げるための孔であるという（前掲書，260頁）。この牛の正面の顔は牛の顔というよりは人間の顔である。古ヨーロッパの南に位置したエジプトのアピス牛を想起させる。アピス牛は黒と白のまだら牛で額に白い星がついており背中には翼の文様のある毛がついていた。空中に飛翔して脚を大地から離すことを意図したのであろう。ランプの牛の額には黒の逆三角形の文様がつく。背中の円筒で火を焚き吊って歩いたのであろう。アピスの場合は，ここに翼の文様の毛があった。古ヨーロッパの牛はアピスより3000年は古い。それでも，この2つの牛の間には共通するものを認めることができる。

ヨーロッパには旧石器時代にすでに人面牛の伝統があった。S.ギーディオン『永遠の現在』（江上波夫，木村重信訳，東京大学出版会，1968年）にいう。フランスのアリエージュにあるレ・トロワ・フレール洞窟は，1912年に自らも旧石器考古学者であったベグエン伯の3人の若い息子たちによって自邸内で発見された。この聖所には3面の奇異な想像画が描かれていた。1つは高さ30センチほどの人間と野牛の合成像で，大きな角のある野牛の頭をし，動物的な手と人間の足をもって立って踊っている。その肩とおぼしき所から尾のある毛の生えたマントが掛けられている。男は弓状楽器のようなものを持つ。この楽人らしい男が追い集めている一群の動物たちも合成動物の姿である（502－3頁，図338）。その2はこの楽人から1メートルも離れていない所にある合成像である。毛皮マントは疑いなく肉体と同化している。角の痕跡のある鋭い目つきで振り向いた頭や大きな目玉や敏感そうな鼻や広い人間的な額などは，これまで知られたどの種族にも見出すことができない。

この合成動物の前足は野牛のものであるが，その股は人間の膝で接合され，ふくらはぎも人間的である。身体の動作は人間的で，野牛とは関係ない。勃起した男根も人間のものである。その3は呪師である。彼の馴鹿の角の生えた頭部には狼の耳が2つと長い髯と2つの大きな目があり，馬の尾と熊の掌のほかは人間の胴体と足と足先である。身体の表面には細い線が多数彫られ，線と線の間は黒で塗られている（502－3頁，図338)。著者ギーディオンは18世紀初頭のオランダ人N.C.ウィトセンの『北及び西タルタリア』（アムステルダム，1705年）に載せる角と耳をつけたトナカイの頭骨を被り，太鼓を手に持つツングース族のシャマンの写生図を引用する（504－5頁，図339，340)。

後期旧石器時代から人間と動物が合成された姿が見られるが，それは日常の姿ではなく何らかの祭りに際しての姿であった。人間が動物の毛皮に包まれることは，人間が動物の世界に参入することを意味した。人間は自身の身体全部を隈なく毛皮で覆うのではなく，故意に顔や手足の一部を出し，その姿勢も毛皮の中身が人間であることを暗示していた。このような姿は，祖先獣であるトーテムの存在を示唆するし，祖先霊や神観念の萠芽をその中に見ることができる。人間が被る動物の毛皮は，牛，馬，熊，鹿などさまざまである。頭部が鳥で胴体が野獣のものもあるが，人間的な姿勢を示すので，人間が2種類あるいはそれ以上の動物の毛皮や羽をつけることがあったと考えられる。人間の顔をつけた場合，鳥の表現は羽や翼でなされたであろう。歴史時代に発展した有翼獣人像は，その萠芽は旧石器時代にあったことになる。動物たちは人間の死後の姿であり，祖先獣となった存在である。これらの動物は，生きた人間にとっては獲物であり大切な食料であった。動物たちは自分たちの子孫である人間を飢えから守ってやるために，この世に出現し人間の獲物となって人間に食べられ，人間の生命を育んだのである。人間は祖先を食べたあと，小骨1つないがしろにせず，祖先の国に帰したのであろう。後期旧石器時代の絵画からいろいろ推測できる。アイヌの熊送りは旧石器時代の原型をよく保持している。東北地方のまたぎを初め狩獵に従事する獵師は山の神に供物を捧げ獲物を分与してくれるよう祈る。獲物は自分たちの先祖たちが死んで，その魂が山の神の胎内に入り，生まれ変わったものと信じられていた。動物は子孫の人間によって殺されたあとは，その魂は山の神の胎内に戻って再生した。山で自然死した動物の魂も同じような運命をたどった。再生するとき，同種類の動物に再生するとは限らなかったようである。トーテム観念は時代が下るに従って部族，家，個人に特定の動物が固定化する傾向にあったが，これも婚姻による混交で常に多様化する契機をはらんでいた。

呪師の胴体（毛皮を被っているかも知れない）に多くの細い線が彫られ，線と線の間は黒く塗られている。毛皮は馬のものかも知れない。あるいは牛か鹿のものかも知れない。これはまだらの表象で，旧石器時代すでにこのような観念が芽生えていたことは注目に値する。ギーディオン，前掲書のペシュ・メルル洞窟の入り口にある馬と雌ライオンの絵には多数の赤い斑点がつけられ，絵の周辺には陰影の手形がいくつか見られる。この伝統は紀元前4000年紀後期のメソポタミア（現イラクのアル・ウカイル）の神殿に描かれた大きな斑点のある動物（ライオンであろう）にも見られる（146－9頁)。ヨーロッパの旧石器

時代の洞窟，例えばアルタミラ洞窟の入り口には陽影あるいは陰影の手形が見られる。この手形には多くの指の2関節分を切り取った手形が見られ，その意味については以前に論じた。ペシュ・メルル洞窟入り口の手形には関節を切り取った痕跡はない。日本には現在でも入り口の楣に88歳になった老人の手形を和紙に押して貼る習慣がある。手形は神，祖霊の象徴である。ペシュ・メルル洞窟入り口にはまだらの動物が2頭いる。この動物は牛か馬と見られるが，境界のまだらの表象で，中国のまだら牛である「物」に当たるものである。御大葬の棺を引いたまだらの牛もこの伝統を承け継いでいる。

因みに，境界では手形と同様，足跡も印した。寺院の境内に仏足石を安置するのがこれで，聖域に入れば足を大地から隔離する必要がなかった。イランの前王朝パハラヴィー王朝（1925 － 79）の王宮の入り口の階段の前に，軍靴をはいた石製の片足が置いてあった。右足を生の象徴として護符の意味を兼ねて置いたのであろう。

1940年に発見されたフランスのラスコー洞窟の後陣のはずれに自然にできた数メートルの深さの井戸と呼ばれる岩の凹みがある。洞窟内の通路にある巨大なクレーターのようなもので，底に水が溜っているので井戸と呼ばれるのであるが，先史時代は綱を伝って下りたとしか考えられない。今は鉄梯子を伝って下りてゆく。4メートル下った所に台状の所があり，壁面に描かれた犀と野牛を見ることができる。牛は投げ槍で傷つき，はらわたが両脚の間に渦状をなして溢れ出ている。牛の傍らに鳥頭で裸体の男が倒れており，その男根は勃起している。男はたった今打ち殺されたかのように仰向けになって両腕を拡げているが指が4本しかない（G・バターユ『ラスコーの壁画』出口裕弘訳，二見書房，1975年，143 － 4頁）。

バターユはこれらの絵の解釈としてブルイユ神父の「おそらく，狩獵の最中に起きた死亡事故を記念する絵」であるとの解釈をあげるが，バターユもいうように鳥頭や鳥の止った棒の説明がない。H. キルヒナーは，これは狩獵中の事故などではなく，横たわっている男も死んではいない。恍惚・亡我の瞬間において描かれたシャマンであるとする。キルヒナーはこれをシエロシェフスキーの報告する（『ヤクート』サンクト・ペテルスブルク，1896年，ロット・ファルク『狩獵の慣習』に再録）ヤクート族の牝牛の供犠の表現に類比している。牝牛の前には，ラスコーと同じように先端に鳥の彫刻のついた3本の杭が描かれている。何本かの杭は，シャマンがいけにえの獣を連れてゆくべき天上への道を示す。鳥たちは補助者としての精霊で，シャマンはこの鳥たちがいないと，失神している間に行われる空中旅行を企てることができない。ブルイユ神父は「アラスカのエスキモーとヴァンクーヴァーのインディアンたちの葬式用の杭」を連想している。倒れた男は棒のように硬直しているが，修行するシャマンの特徴である。バターユは，犀が野牛の腹を裂き，野牛が男を殺したというふうに想定する。バターユ自身もいうように，この説明もやはり不充分である（バターユ，前掲書，211－5頁）。

私の解釈を述べておこう。ラスコー洞窟の最奥部にあるクレーターのような井戸は地上の大きな泉のようなもので，地上ではこの世とあの世の境界である。シューベルトの歌曲集『冬の旅』にある「菩提樹」の歌詞に見られるように，都門の前に泉があり，そこに生

命の木が１本立っていた。都門は境界の１つであった。洞窟の奥にあるクレーター状の泉（井戸）も同じで，洞窟の入り口が第１の境界とすると，この井戸は最後の境界であった。地上から地下に入る境界に描かれた絵として解釈するのがよいと考えられる。ブルイユ神父が北方のエスキモー（イヌイット）やインディアンの葬式で用いられる杭を洞窟画の杭と同定したのは卓見である。別稿の「祖先柱考」で論じたが，これらの柱，杭，棒は境界，埋葬地に立てられ，死者が地中から再生して地上に出現する表象とされた。朝鮮文化では村落の入り口に先端に木彫りの鳥をつけた竿を立てる。わが弥生時代の古墳の周濠から古墳に立てた鳥竿が発見されている。鳥は死者の魂をあの世に運ぶと見られるが，洞窟の最奥部にも同じものがあるので，別の考え方に依る必要がある。鳥は死者の魂そのものであったと考えられる。以前に論じたが，イランやインドや中国では，再生儀礼において最初に出現するのは鳥あるいは風で，そのあと馬，牛，猪などに生まれ変わり，最後に人間に生まれ変わる。新年式，成人式，即位式のような通過儀礼で行われた死と再生の儀礼では転生の模擬儀礼が行われた。

洞窟画では野牛が槍で刺され，螺旋状のはらわたが腹から出ている。旧石器時代の儀礼と同じものが，現在の中国の少数民族や東アジアの諸民族の間で保持されている。別稿「祖先柱考」でも述べたが，湖南省の苗族の間で行われる椎牛祖先祭がそれである。この祭りでは，直径70センチほどの輪をはめた柱が広場に立てられる。供犠される水牛の鼻輪が輪につながれると人びとは槍で水牛の心臓の部位を刺す。牛が地上に倒れると頭を切り落とす。首は主催者の家の大黒柱の上に１年間供えられる。水牛は祖先神として毎年秋の収穫時に子孫を訪れ，子孫に肉と血を与えることによって子孫を再生させる。首の重要性に関しては，エジプトのアピス牛のそれと同じである。

ラスコーの壁画では，殺された野牛の傍らに鳥頭の人物が男根を勃起させて仰向けに倒れている。男が憑依状態にあるシャマンという説があるが，勃起の意味を説明しない。後期旧石器時代すでに祖先獣の観念が発達しており，この野牛が子孫である人間の繁殖のエネルギーをもたらすので野牛を殺害する人物は供犠の執行者であり射精者として認識される。野牛の腹から溢れ出た螺旋状の腸は渦巻き表象で，蛙の腹わたやヨーロッパのキリスト教聖堂床面の渦巻き文，ケルト文化の渦巻き迷路などに見られるように，死と再生の境界に存在する障害の表象で，野牛はこのような状況において殺害されたのである。ラスコーの壁画には，牛と鳥頭の人物のほかに，先端に鳥の止まった棒が見られる。

この棒は前述したように鳥竿で，境界に立つ祖先柱であった。朝鮮文化ではこの鳥竿はソッテあるいはスサルデと呼ばれ境界である村落の入り口に立てられるもので，中国の史書『三国志』魏志東夷伝馬韓条などに蘇塗と写音されて出てくる。蘇塗は鈴や鼓を掛けた大木で，この根元には逃亡者も匿まわれた。恐らく大木の先端には木の鳥形が取りつけてあったと考えられる。この大木の位置はそれぞれの国邑で別邑をなしたとあるが，祖先神（天神）を祭った境界の地であった。現在の韓国の村落の入り口には，高い鳥竿の左右に長生（チャンスン）という低い偶像が立つ。２つの偶像は，生と死を表象する祖先像であろう。真ん中の鳥竿の鳥も竿もいずれも同一の祖先の集合的表象であるので，後期旧石器時代以来の伝統が

見られるのである。

ラスコーの壁画には屠殺される野牛とは別に，殺害されない犀が見られる。犀は，ギーディオン，前掲書によると，同じ後期旧石器時代のフランス，ペシュ・メルル洞窟の線刻画に見られるように，羚羊，雌獅子と重ね合わされ，それぞれの頭と尻尾をつけた尻がはっきりと識別できるように描かれている。人はこれらの動物を合成することによって，強大な力を持った動物を描こうとしたのではないかとする。しかし，その意味は決定しない方がよいのではないかと著者は留保する（326 － 7 頁）。ラスコーの犀は単体で描かれる。ペシュ・メルルの合成動物は，祖先霊の集合的表象で，その中の１頭が代表として供犠される前の状態を描いているのだと思う。供犠されると，この場合は，２頭が切り離されることになる。さらに２頭は１頭ずつ分離する可能性がある。

スペイン北部のアルタミラ洞窟の近くにあるエル・カスティーリョ洞窟の赤い壁龕に，５つの赤い女陰表象と男根を表わす黒い羽根つきの１本の棒が描いてある。ここでは色の象徴性が見られる。赤は女性の象徴で生命と血液の色である。黒は男性の象徴で死と腐敗した血液の色である。女性は子孫を生産する赤で表わされ，男性は死を象徴する黒で表わされる。黒はこの世にエネルギーをもたらす祖霊と関連するので，絶対的な死の象徴ではない。ラスコーの井戸の壁画では，仰向けに横たわる勃起した男根をつけた男性が描かれていた。男性は死を象徴するが，子孫を残す再生の契機をはらんでいる。男性は鳥頭である。横に鳥形のついた棒があり，これが鳥竿に相当することは前述した。朝鮮文化では鳥竿の左右に長生がある。ラスコーの絵の野牛は女性原理で仰向けの男性と対になる。野牛は女性表象であろう。供犠されたので死の表象であるが，生のエネルギーを放出している。犀が野牛と対になり，生を表象する。朝鮮文化の長生は鳥竿の左右の祖先獣である野牛と犀に相当する。後期旧石器時代以来の伝統がこの中に見られるのである。

日本の中部地方から東にかけて道祖神を祭る。道祖神は村境や辻に祭られる岩石で，男根や女陰の形に彫ってあったり，男女神交会の図像が彫刻してある。道祖神の祭りは正月７日の人日あるいは 15 日の小正月に関するものが多い。男根はベンガラで赤く塗られ情熱が横溢する巨根を強調する。人日や小正月は，祖霊を迎えあるいはあの世に送り返す日であったので，勃起した真っ赤な男根は祖霊のエネルギーの入ったものであった。この道祖神は旧石器時代の伝統を受け継いだものと思う。前述したエル・カスティーリョでは女陰は赤く，男根は黒く塗ってあるが，色彩表象は民族，時代によって違うので安定しない。長野県では諏訪大社の御柱祭が代表的事例であるが，南安曇郡では東村，境町，下町，本町の４か所で，オンバシラという道祖神柱を立てる。かつては各所の柱に男根の張り型をオンバシラに取りつけていたが，現在は東村だけが密かにこの行事をつづけている。以前は１月７日に立てて旧暦の「２月 10 日正月」にはずしたが，現在は１月２日から小正月の 15 日までである（萩原秀三郎『神樹』小学館，2001 年，30 頁）。この記述によれば，オンバシラにはかつてはそれぞれ男根の張り型がつけられた。オンバシラ自体が祖先柱であるので，男根は大挙してやってくる祖霊たちの代表的男根であった。オンバシラは祖霊でそれは勃起した男根を持っていた。それを担ぐのは男性であるので，女性表象は見られな

い。

ヘロドトス『歴史』が伝える行事を見てみよう。エジプトでは豚を神にいけにえとして捧げることを禁じているが，イシス女神とオシリス神には豚を満月の日に供犠してその肉を食べる。エジプト人は他の祭礼では豚を忌むのになぜこの祭りだけは豚を供犠するのかについては，エジプト人の間に伝承がある。私（著者ヘロドトスのこと）はそれを知っているが，ここでは述べない方がよかろう。イシス女神の祭りは次のようである。豚を屠るとその尾の端と脾臓と内臓を包む大網膜を集め，皮下脂肪で包み火に焼く。残りの肉は満月の日に食べるが，日が変わるともはや口にしない。貧民は粉を捏ねて豚の形につくりそれを炙って神に供える。オシリス神に対しては以下のようにする。オシリス神にはその祭りの前夜，エジプト人は家の前で子豚を供犠する。子豚はそれを売った豚飼いに持ち帰らせる。それ以外の点では，ギリシアのディオニュソス祭とほとんど全く同じことをする。エジプトでは男根像の代わりに，胴体とあまり変わらぬ長さ90センチもある巨大な男根のついたオシリス像をつくり，それを先頭に女たちはその後ろに従う。男根はひもで引っ張って動く仕組みになっている（2.47 － 8）。

日常は豚を神に供犠しなかった。豚は神の他我とされたので，神がまだ弱ってなく元気なときは，みだりに神の他我である豚を殺し，エネルギーを無駄に放出させなかったのである。満月の日に供犠したとあるが，毎月の満月の日ではなく，のちには年１度の満月である新年を指すようになった。日本の１月15日の小正月は古くは１か月前の12月15日の満月の日と共に１年の変わり目の新年とされた。エジプト人はイシス，オシリス神に豚を供犠し，神人共食することにより，神人共に再生した。ヘロドトスはこの理由を述べることをはばかっている。男根を誇示するオシリス像は，ギリシアの酒神ディオニュソス（ローマのバッカス）よりは，勃起した男根をつけた岩石のヘルメスに似ている。ヘロドトスによると，ヘルメスの男根もペラスゴイ人を通じてエジプトから流入したものという（2.51）。日本で元日から小正月までの期間に祭られる男女の神像あるいは男女の性器を彫刻した境界の道祖神を想起させる。男根像を行列をつくって持ち歩くのもそれなりの意味があって，境界における豊穣儀礼にまでさかのぼる。スペインに遺存するイスラム建築で目を引くのは，入り口の枠の男根象徴である。建て前では鍵の穴と説明する。合理的解釈として捨てるわけにはゆかないが，旧石器時代以来の境界における男根表象と考える方が比較文化史の観点から見ると説得力があるのではなかろうか。

ラスコーの野牛屠殺では螺旋状の内臓と尻尾が見られた。離れた位置にいる犀の尻尾も明瞭に描かれている。横たわった鳥頭の男の勃起した男根もある。エジプトのオシリス祭には旧石器時代からの供犠儀礼が伝承されているのがうかがえる。神には脂肪に包まれた内臓や尾の先端を焼いてその匂いを神の許に送り，人間は肉や血をいただいた。

神社の供物の中には，鹿，猪，兎のような動物形のパン菓子がある。オシリス祭では，満月の日に供えた子豚（の遺骸）は豚飼いに持ち帰らせた。エジプト人は祭りの翌日には豚は穢れとして手を触れることもなかった。豚飼いには穢れに対する免疫力があった。前述したようにヘロドトスは別の個所で，聖牛であるアピス牛の首はナイル川に流したが，

ギリシア商人がいる場合は牛の首を売り払ったといっている。ギリシア人はエジプト人にとっては地中海を隔てた異界の住人であったので，祭りが済んで神人共食の残りものとなった――しかしもっとも強力なエネルギーを放出する――牛の首をあつかうことに対して免疫力を持っていた。ギリシア人にとってはアピス牛の首はご馳走以外の何ものでもなかった。エジプト人は家の前で子豚を供犠した。入り口を祭壇とした伝統が保たれていたことが分かる。

旧石器時代の洞窟壁画に見られる先端に羽根をつけた棒や同じく鳥の止まった棒は男根の表象と考えられる。朝鮮文化で村落入り口に見られる左右に人像の長生を並置した鳥竿も本来は男女の長生の再生の具である男根の表象である。同じ朝鮮文化で村落入り口に見られる天下大将軍像と地下女将軍と傍らに立つ長生も対になったもので，別の支派によって将来された境界の表象である。萩原，前掲書にいう正月にオンバシラと称して，道祖神祭に担ぎまわる先端に飾りのついた柱は男根の名残りを止めている（30 － 5 頁）。

萩原，前掲書には東南アジア諸民族の貴重な写真が多く掲載されている。犠牲獣をつないで屠るにえ柱の上部には鳥の彫像が見られる。その下に１つあるいは２つ籠状のものがある場合がある。柱の先端には唐傘を拡げたときのような骨が20本前後，円形に放射している。萩原は太陽表象であるとする。旧石器時代の壁画には，羽根のついた棒が描かれていて，鳥のついた棒と同一視される。旧石器時代のものは竹箒状で東南アジアのものは唐傘の骨状である。柱がその真ん中を突き抜けている籠や箕は，萩原，前掲書，86 頁にもいうように，年の暮れに祖霊の依り代となる餅や飯をその中にのせる箕と同じものである。世界の文化に広く見られる箕や籠については別稿で論じたい。

傘の骨や籠は太陽の表象とは考えられないが，古代中近東からエジプトにかけて見られる有翼円盤あるいは有翼日輪の観念と関連するものかも知れない。別稿でも論じたが，有翼円盤は文化によって少しずつ異なっていた。エジプトの円盤は太陽と解釈することができるので，東南アジアのにえ柱は鳥と太陽円盤がついていると解釈できよう。古代イランの有翼円盤の場合，円盤ではなくその円形は連珠の形式である。ササン朝の連珠文は古代ペルシアのこの連珠文を伝承したものであろう。林良一『シルクロード』（美術出版社，1962 年）にいう。ローマのヴァティカーノ博物館にある鶏文錦の鶏（挿図 26d），バーミヤーン石窟壁画の鳥（挿図 26e），キジル最大洞壁画の家鴨（挿図 26f）はみな連珠文の中に描かれ，嘴に真珠の首飾りをくわえている。真珠は王権の表象である古代イランのフワルナフである。連珠文はイラン美術において何らかの瑞祥的意味を持っていたらしい（182 － 3 頁）。

別稿でイランのベヒスタンに残るアケメネス王朝の磨崖碑文に見られる有翼円盤は，円盤ではなく連珠環であることを論じた。鳥の翼が左右に広がり２本の脚が下に伸びていて，円環の中から人像（神像）が半身を出し，裾の１部が下部に見られる左手には径 10 センチ余りの円環を持つ。イランの有翼円盤は有翼日輪ではなく，円珠１つ１つは祖霊（フラワシ）を表わす。年末から正月にかけて群行して来訪するフラワシが連珠文として表現されたのである。連珠はフラワシの集合体で円環の中に見られるのは祖霊が人像化された

ものである。ベヒスタンの有翼円盤は鳥と祖霊から成る円環文様で，旧石器時代以来伝承されてきた再生を目的とした文様である。ベヒスタンの場合は，捕虜にした敵将たちを前にしてダリウス大王が祖霊の加護のもとに戦功を誇っているのである。ササン朝美術に見られる連珠文と真珠の首飾りを嘴にくわえる鳥を円環の中に配した文様はアケメネスの文様を継承したものである。アケメネス朝以前のイランの例としては，ルリスタン青銅器の縁取りにも連珠文が見られる。ルリスタン青銅器の製作者は動物文の意匠からイラン民族の１支派であるスキュタイ人と推測されるので，祖霊の観念を持っていたと考えられる。ルリスタン青銅器は出土状況が不明のものが多いが祭器であることに異論はないので，司祭者あるいは埋葬された死者の再生のための文様であることは間違いない。

イランのケルマンシャー州に残るターケ・ボスターン大洞の浮き彫りに見られる王の衣服，王冠，服飾品に連珠文が用いられる。ティアラの環も連珠形式である。法隆寺に伝わる「獅子狩り文錦」に用いられた連珠文では，円文の中に４体のササン朝後期の同一の王が生命樹を中心に左右２体ずつ獅子狩りをする絵が織られている。唐代の作品であるが，冠の形状から見てイラン文化圏の職人がデザインしたことは確実である。生命樹のもとでの儀礼的獅子狩りは，即位式を想起させる。生命樹は果樹をたわわに実らせるが鳥の姿は見当たらない。しかし王が騎乗する馬はいずれも有翼で天馬と呼ばれるものである。獅子は古代中東の王家が祖先獣とした動物で，儀式のたびに獅子を殺害し，そのエネルギーを身に受けて王は再生したのであった。ラスコー洞窟の井戸に見られる絵の伝統がこの錦の文様の中に見られる。生命樹は男根表象であり，獅子狩りの絵を取り巻く連珠文は，群行して来訪する祖先霊フラワシである。ササン朝の王がティアラに連珠を用いたり，衣服に連珠文を多用したのは，晴れの場でいつも祖先霊と共にいることを願ったことに由来する。

中国の皇帝は袍の背に五爪の竜の刺繍のある補子をつけた。高官たちは正月，それぞれの身分によって貂（てん）などの毛皮を身につけたことが敦崇『燕京歳時記』（小野勝年訳，東洋文庫，1967年，26頁）に出ている。新年のある期間，祖先獣の毛皮を身につけてよみがえりをしたのであった。このように年の変わり目にトーテムと合体する考えは，日本の冠婚葬祭に際して着用する紋付きと同じものである。日本の紋は植物と器物，文様，天文などが９割を占め，鳥，動物などの紋は１割しかない。植物も動物も器物も本来はトーテムであったと考えられ，子孫はトーテムと共存することで安定感を得た。紋や紋付きの起源は比較的新しいものであるが，このような紋は家または個人のしるしとして，あるいは地域のしるしとして用いられていたのではないだろうか。このようにササン朝の連珠文はアケメネス朝文化の連続で，連珠は首飾りの真珠と考えられるようになったが，連珠そのものは群行して来訪する祖霊であった。『古代オリエント事典』（岩波書店，2004年）「連珠文」によると，この文様はササン朝よりもむしろ中央アジア（ソグディアナ）から出土する作品に多く見られる。それゆえ，その起源は中央アジア西南部（オクソス川中流域）であろう（田辺勝美）という。さらに，ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館蔵の霊鳥シームルグを表したササン朝絹織物断片の図を掲げる。

J.B. プリチャード『写真で見る古代オリエント』（プリンストン大学出版局，1969年）によっていくつかの有翼円盤を見てみよう。イラクのモースル西部のテル・アブタ出土の石碑では，町の創設者がマルドゥク神のマル（生命樹），ナブ神の竹筆，太陽神の円盤，月神の三日月，イシュタル女神の八芒星を拝礼している（453図）。ヒッタイトの雷神が牡牛の上に立ち，頭上に有翼円盤を掲げている。この雷神は左手に3つ叉の矛を持つ（532図）。神が牡牛の頭をつけた有翼の獅子の背に立っている。神は一連の羽根で飾った角のついたミトラ冠を被っている（534図）。これらの事例を分析すると，神または王が牡牛の背に乗り，王の頭上に有翼円盤がある。神または王の冠は羽根で飾られている。というのは鳥頭の表象をつけていることを意味する。イランのベヒスタンの有翼円盤から半身を出した人像は神像ではなく祖先像であることは前述した。アッシリアやヒッタイトの牡牛の背に乗った神は，本来は祖先霊であった可能性がある。この祖先神が3つ叉の矛で牡牛を屠殺するのであろう。トーテムの牡牛のエネルギーが祖先神に移り，祖先神は再生する。前掲の有翼円盤の円盤はいずれも連珠文形式にはなっていないが，円環であることは注目に値する。円環の中に何かが彫刻されているようであるが，それが何であるか不明である。

エジプト学では有翼円盤を有翼日輪と呼び太陽に翼がついたものと見る。ことにツタンカーメン王の遺宝からは有翼円盤の文様が多く出てくる。王の父であるアメンホテプ4世すなわちアクエンアトン（イクナトン）王の家族団欒図では，天上の太陽から光線が放射して家族に降り注ぐのであるが，光線の先端は手形になっている。つまり癒しの手形というもので，一家がこれによって癒されるのが目的であった。斎藤尚生はその著『有翼日輪の謎』（中公文庫，1982）の中で，ツタンカーメン王の有翼日輪は皆既日食のときに見られる赤道型コロナを表わすという仮説を立てる。定説になっている「ハゲワシ説」は，太陽のシンボルにハゲワシの翼をつけたものに過ぎないと主張する（103頁）。有翼日輪はイクナトン王よりずっと以前からエジプトで見られる宗教的象徴であるが，太陽信仰の篤かったイクナトン王により一時的に光線日輪に切り換わり，それが再びツタンカーメン王時代の半ばから復活して，以後ずっと使われていたことが知られている（斎藤，前掲書，98頁）。皆既日食のコロナは左右にこんなに拡がって見えるのであろうか。やはり従来の有翼説も捨て難い説である。

ツタンカーメン王の遺宝の中に，王の胸飾りとしてつくられた黄金の有翼スカラベ像がある。一般に見られるのはファイアンスでつくった有翼スカラベで，模造品はエジプトの土産店で売られている。スカラベ，つまりフンコロガシは体長3－5センチの甲虫で，動物の糞を球状にして後ろ向きに地上を転がす。糞の中に産卵し，春になると中の幼虫が変態して成虫として出てくる。糞球は太陽の象徴とされたらしい。この立場だと，ツタンカーメン王の胸飾りの有翼スカラベは有翼日輪の変形ということになる。スカラベは毎日死と再生を繰り返す太陽と結びつけられるようになるが，それ以前の段階があったと考えられる。スカラベが毎年地上で死んでも，その子孫が糞土の中から再生することに気付いたエジプト人は，埋葬されたミイラの魂が甲虫の姿を借りて地上に現れ，子孫にエネルギーを与えると考えたのであろう。ツタンカーメン王の別の遺品では，有翼円盤（といっ

ても円環である）の下にスカラベを配している。スカラベは左右に格子状の羽根をつけ，それぞれの羽根を女神が支えている。スカラベは太陽の象徴とされる以前，土中から出現する死者の魂と見なされる段階があった。前述したように，天の子として出現するアピス聖牛の舌の裏にはスカラベ状の肉の塊りがあった。中国の死者は舌の裏に白玉の蟬形を含ませた。蟬にあやかって地中から再生するように願ったのであろう。貨幣が流用するようになってからは硬貨を用いる文化も知られている。

イランのシーア派イスラム教徒は，死者の口中に5人のシーア派聖者（モハンマド，ファーテメ，ハサン，ホセイン，アリー）の名を刻った厚さ3～4ミリ，幅1.5センチ，長さ3センチほどの楕円形の瑪瑙を入れる。イランでは農民が農地で発見する場合が多く，それが店頭に並べられている。5人の聖者（パンジュ・タン）はシーア派教徒にとっての祖先で，死者はその霊と共にあって守護されて審判を受ける。なぜ舌の裏なのかについては別に論じたいが，エジプト，ギリシア，イラン，中国，日本などに見られる事例から考えると，甲虫は太陽ではなく祖先霊や神の表象であったことが分かる。エジプト人の霊魂の1つであるカは，夜な夜なミイラから離れて墓室に開けられた穴から飛び出し，日の出と共にミイラの身体に戻るとされた。ツタンカーメン王のミイラに副葬された有翼円環や有翼スカラベもこれらの魂あるいは祖霊に相当する霊魂であった。旧石器時代以来の鳥による祖霊の表象の伝承がエジプトにもあるのである。円環は発生的には日輪ではないので，その中に人，鳥，虫があっても不思議ではない。

有翼の部分は鳥を表わすので旧石器時代以来の鳥の表象であるので問題はない。一方，ベヒスタンの有翼円盤の翼の部分は翼ではなく波型であることは既に論じた。円環は波に浮かぶ祖霊を表わす。イラン人の祖先はカスピ海，黒海のような海や，ヨーロッパ諸国を流れ黒海に流入するドナウ，ドン，ドニェプル，ドニェストル，ドニェツのような諸川に接してきた。イラン人の祖霊が海や川の向こうからやってくるという観念を表象したのがベヒスタンの有翼円盤であろう。因みに，これらの河川名に見られるドンということばはイラン系のことばで川を意味する。

有翼円盤には2つある。1つは鳥の翼をつけた円環であり，1つは水上を浮游する円環である。前者が日本に伝播して正月に入り口の楣の上につける正月飾りになったことは別稿で述べた。E.S.モース（1838－1925）は『日本その日その日』(2，石川欣一訳，東洋文庫，全3巻，1970年）の中で，明治10年代の正月飾りについて正確なスケッチと共に解説を加えている。彼の観察によると，正月飾りとして入り口の楣の上に掛けるものに，普通目に入るものとは別種のものがあった。それは幅が60センチ以上，長さは90センチあった。左縒りの縄は舟型にしつらえられ，へさきとともは他のしめ縄と同じように細くなって締めくくられている。舟には稲藁でつくった3個の球，それに挿された松の小枝3本と鮮紅色の果実若干である。舟の下には3条の稲の藁の束が下がり，真ん中の束には稲の果の束がついている（229頁）。舟形は正月2日に飾る宝舟と同じものである。3つの球体が何を表わすのか，今答えられるのは3種の霊魂である。海の彼方から来訪するまれびとを表したのであろう。神の子イエスの誕生に際し，東方の三博士が嬰児を訪ねてきたと

いう伝説があるが，その来訪者と関係がある。

エジプトに戻ろう。中近東の古代遺跡では，有翼円盤の図像は王の彫像のある入り口や窓枠の上に彫られる。ベヒスタンの場合は，磨崖に掘られたダリウス大王の墓の入り口に有翼円盤がある。H.C. トランブル『敷居上での契約』（エディンバラ，1896 年）にいう。有翼日輪はとりわけ，神殿の入り口の楣に設けられた。それはそこにあるホルス神の像が聖なる神殿からあらゆる悪霊を追い払うためである。入り口を覆う翼は，その下にある入り口の特別な聖性を明示した。祭司が神殿の至聖所である入り口の扉を開いたとき，彼は敷居に対してひれ伏さなければならなかった。テーベの儀式に従って，彼は入り口の神像を見るやいなや，大地（敷居）にキスして顔面を押しつけた（127 － 8 頁）。

トランブルはこの情報をベルリン大学の A. エルマン『古代エジプト人とその生活』（テュービンゲン，日付なし）から引用している。敷居の聖性は古代エジプトの時代から現在に至るまで，イスラム諸国をはじめ世界の諸国で，変容を経ながらも確認することができる。東大寺大仏殿の入り口である南門の左右に安置された高さ 8 メートル余りの金剛力士つまり仁王は，現在はあるいは既に創立時から本堂の大仏の守護神である。本堂や拝殿がなく，したがって本尊もない時代の入り口の主神であったが，のちに本堂ができるようになって守護神になったのであろう。メキシコのユカタン半島に残るマヤ・アステカ文明でも，エジプトと同じくらい入り口が重要な地位を占めている。トランブル，前掲書によると，入り口の楣の上は重厚な装飾が施され，左右には男性，女性の像，あるいは動物像が守護神として彫刻されている。ときに，有翼の球体が見られ，その場所あるいは入り口の両がわに手形が見られる（146 頁）。朝鮮文化の天下大将軍と地下女将軍，日本の狛犬や狐，犬，狼など寺社の入り口の守護動物と同じものが見られる。日本では現在でも，米寿を迎えた男性は墨で四角い紙に右手の手形を押し，女性は朱で左手の手形を押して入り口の楣の上に貼る。米寿の男女は神にも等しい長寿と寿がれたので，家屋の中に神がいるという意味合いで，男女の手形が押されたのであった。入り口，境界における神の足跡と同じ考えに立っていた。これらの手形は旧石器時代の洞窟の入り口にも見られることは前述した。ユカタン半島の文化では入り口の楣の上に有翼球体が見られた。円環ではなくて球体である。同じものは日本の正月飾りの中央につけられたダイダイであろう。ダイダイは球体以外の何ものでもない。前述したモース，前掲書に描かれた正月飾りの舟に載せられた 3 個の球体とも通じるものである。マヤ・アステカ文化も日本文化も，その起源はアジアの奥地にあったと考えなければならない。日本文化が新大陸へ渡ったとか，前マヤ・アステカ文化が日本に渡来したとか考えるのは適当ではない。

斎藤，前掲書で斎藤はツタンカーメン王の有翼日輪は，皆既日食のときに見られる赤道型コロナを表わすという有翼日輪日食説を出した。斎藤によると，現在の定説は太陽のシンボルにハゲワシの翼をつけた「ハゲワシ説」であるという（103 頁以下）。時代的にはツタンカーメン王よりは古い時期から近い時期のメソポタミア，イラン，アナトリア出土の印章に鷲が愛用されたことが明らかになっている。ドイツのナチスの紋章の 1 つに，円環の中にかぎ十字を配したものの上に，翼を拡げた鷲が止まっているものがある。ゲルマン

民族にも同じような観念が伝承された。十字表象については以前論じた。堀　晄「イランおよびアフガニスタン出土の分銅について」『深井晋司博士追悼　シルクロード美術論集』所収（吉川弘文館，1987年）によると，鷲は天あるいは太陽を象徴するものとして用いられたらしい。シュメルの初期王朝の印章には，山羊や牛の群の上に翼を拡げた鷲が描かれ，その翼からは太陽の光があまねく大地を照らしている。別の印章では上に饗宴の場面が描かれ，下に動植物を覆うように鷲が翼を拡げている。これは豊穣のモチーフである。別の印章では生命の木と動物が描かれ，木の上には翼を拡げた鷲が止まっている。これは後世の柱の上に立つ有翼円盤の原形で，柱は元来生命の木を，有翼円盤は太陽の象徴としての鷲を意味していた（58頁）。

鷲は古代オリエントの文化では，ゾロアスター教に限らず，人間や動物の死体の腐肉を食べる自然の清掃者であった。鷲がつつく前に獅子や豹のいる地域では最初の嗜食者は彼らであった。放置された肉や骨はそのあとジャッカルと鷲が清掃した。ワシ，タカの体内には人間の魂ばかりでなく，野獣や家畜の魂が入り，鳥と共に空を飛ぶことになる。ゾロアスター教では，この種の魂はフラワシと呼ばれ人間の死後も存続しつづける。フラワシは新たに生まれる赤ん坊に入ったり，山の神の胎内に入って野獣に生まれ変わる。仏教に限らず，多くの文化に輪廻転生の思想があるが，その根底にある転移する魂はゾロアスター教のフラワシと同じものである。因みにフラワシという古代イラン語は，「促進させる因子」の意味を持つ。シュメルの印章で，動物や植物の上で鷲が翼を拡げるのは祖先の霊のエネルギーを注ぐ行為を描いているのである。前掲書，55頁にある円筒印章の展開図を見ても鷲が放射するのは豊穣のエネルギーで太陽光には見えない。生命の木の先端に鷲が翼を拡げて止まる図は，柱の上に立つ有翼円盤の原形であるとするが，鳥が止まる柱は前述したように旧石器時代から鳥竿のように現在に至るまであるが，柱の上に有翼円盤のついたものは見ない。これらの円盤は鷲の胴体ではなく，上来述べてきた円環や飛輪（日輪）は，不滅の祖霊でありエネルギーであると解するのがもっとも妥当である。

前述した聖牛アピスは，ヘロドトスによるといろいろな宗教的特徴を持っていた。ステファヌ・ロッシーニ，リュト・シュアン＝アンテルム『エジプトの神々事典』（矢島文夫・吉田春美訳，河出書房新社，1997年）によると，アピスはメンフィスを起源とし，第1王朝時代から信仰されていた。アピスは雄牛あるいは雄牛の形を持つ人間の形で表わされるが，ミイラの姿をしていることもある。アピスは角の間に円盤をつけ，背中の前と後ろから鷲の翼が垂れ下っている。アピスは魂と考えられ，豊穣の神であり，ミイラの姿をしたプタハ神の化身とされた。アピスはプタハの先触れとされ，プタハに宇宙的秩序を与える者とされた。そこでアピスは冥界の王オシリスと同一視された。アピスは葬祭と関係を持ち，死者を背中に乗せて墓に運ぶようになった。後の時代には，アピスはソカリスやホルスと結びつけられ太陽の側面を持つようになり，天の雄牛として月とも関係づけられるようになる。ホルアピスは王の近くにいて，戴冠式や聖年祭のとき儀式に参加した（34－5頁）。

ヘロドトスやプルタークが伝えるアピス像は後期のものであるが，本質面はよく伝えて

いる。太陽円盤として代表的に引用されるのは，1匹のウラエウス蛇によって周りを取り囲まれた円盤を隼(はやぶさ)の頭につけたラーの神像である。蛇の頭が円盤の左右どちらかの下に出ていて，体は環状に円盤を取り巻く。ラーはカイロの北方ヘリオポリスの神で，太陽信仰の都の主神であった。頭上に載せる円盤は太陽に間違いない。ラー像は翼のモチーフを持たない。因みに蛇のモチーフであるが，これが古代の有翼円盤の周囲に見られる円環の起源である。円盤とそれに巻きついた蛇は何を表象するのであろうか。円盤は日輪と見られる他に，別の見方も可能である。

古代ペルシアの有翼円盤は空中に浮遊するフラワシであろうと述べた。その際，円盤ではなく円環である点を強調した。私は円環のみで中空であると考えたが，円環の内部は実在する円であることに気付いた。円環もフラワシの表象であり，円盤もそうである。ペルシアの場合，円環は連続した小円から成り，これがササン朝の連珠文の起源になったことは前述した。アケメネス朝の連珠円環も群行して来訪する祖霊フラワシを表象したものである。アケメネス朝の連珠円環の源流はエジプトのウラエウス円盤にあると思われる。三笠宮崇仁『古代エジプトの神々』（日本放送出版協会，1988年）によると，エジプトのテーベにある前1300年頃のセンネジェムの墓の最奥部の壁画に死後の理想郷の殆ど完全といえる光景が保たれている（口絵，死後の世界）。この壁画の原色写真では，太い水路で四角に区画され，細い流れで区切られた芦の原や果樹園でセンネジェムが働く姿が見られる。芦の原はエジプト学でいう冥界のことであるが，センネジェムは黒白まだらの牛を使って開墾している。この牛はエジプト神話に出る冥界の王オシリスの聖牛アピスである。四角い区画の第1の区切りでは，ミイラにされたセンネジェムの口を開く儀式が行われ，ラー神やオシリス神の前で再生儀礼が行われている。第1の水路上をへさきに鳥が止まった太陽の船に乗った太陽神ラーが進む。船のへさきととも（船尾）に向かってマントヒヒが両手を捧げて恭敬の意を表している。

因みに，これらのマントヒヒが獣皮を被った人間であることは，絵から読み取ることができる。船に乗るラー神は立て膝をしているが，膝がしらにクルックス・アンサータを立てている。ラー神も人が中に入っているように見える。クルックス・アンサータというのはエジプト語アンクのラテン語訳で，「鉤つき十字」の意で，エジプト十字といわれるものである。鉤の部分は人体の頭部を表わし，クルックス・アンサータは関係者（この場合はラー神）の他我としての人形(ひとがた)である。隼の面を被ったラー神の頭上の円盤は太陽と見るのが無難であるが，魂の一種とも見られる。蛇も人間の魂の一種である。世界の歴史で，冬期に先人の墓を掘らなければならないときに経験するのは，墓中の隙間に副葬品と共に冬眠する蛇の姿であった。蛇は祖先の霊魂の化身で，宝物の守護者であるとされた。センネジェムの墓に見られる蛇は体に輪状の文様がある。エジプトの場合は蛇の頭があるので祖霊の表象の蛇として認識されたが，蛇の頭が取れた段階では輪状の文様は連珠文に発展する契機となった。

古代ペルシアの有翼円盤の外縁は連珠型になっていて，これがエジプトの蛇に遡ることを論じた。エジプトの有翼円盤にホルベヘデティ（S. ロッシーニ，前掲書，22-II）の象

徴がある。それは左右に2匹の蛇が首を出した円盤に巨大な翼が左右についたものである。ホルベヘデティは太陽とは関係がない。ミイラ処理をする以前の死体が鷲や鷹によって食べられ，死者の霊魂が鳥の体内に入ったのがこのような有翼円盤で表わされたのであろう。太陽神ラーが隼の頭上に乗る円盤と蛇で表象されたが，日輪と認識される以前は霊魂の表象であったと思う。別稿で古代ペルシアの有翼円盤と日本の正月飾りの関係を論じた。そのとき，円盤を取り巻く円環を強調する余り，円盤について触れることがなかった。円環は連珠文のある環であり，さらに古くは蛇であった。以前，正月飾りの左縒りの綱は翼に相当すると述べたが，蛇を象徴するしめ縄（吉野裕子説）であるという考えに達した。正月飾りの円球や矩形と共に祖霊の表象であった。古式の鳥居は左右の柱の間にしめ縄を渡すが，中央の額も縄も神霊の表象であった。有翼円盤の鳥の脚や正月飾りの垂れた藁や裏白や四手は翼として発達した鳥の表象である。

テーベの神コンスは，布で巻かれたミイラが両腕を出し，ジェド柱，笏，クルックス・アンサータを持ち，さらにからざおと曲杖を持つ。頭上には中央に円盤を載せた聖牛アピスの角をつける。メンフィスの神ソカリスははち巻きに蛇を用い，頭上には2本の角，円盤，2枚の隼の羽根をつけ，手には曲杖とからざおを持つ。ソカリスはミイラの神プタハと共に祭られ，葬祭の神とされた。聖角，蛇，円盤，翼は死者儀礼に用いられる象徴で，円盤はこの場合も魂を表わす。曲杖とからざおは牧畜と農耕の象徴で豊穣の象徴であり，ファラオの所有物とされた。曲杖はこうもり傘の取っ手のような部分のついた杖で，牧夫はこれで羊をたぐり寄せる。キリスト教では司教杖としてその伝統が生きている。

有翼円盤ということばは，円盤に翼がつき，魂の表象である円盤が空中に浮遊する印象を与える。この印象は正しい。さらに考察すると，この翼は円盤を取り巻く蛇にもついたと思われる。前述したように蛇は冬眠するとき，人間の埋葬墓地にできた地下の間隙を利用することが，墓地を冬期に発掘する者によって古来経験されてきた。蛇は副葬品である財宝の守護者であり，死者の化身そのものであった。蛇は死者の魂と見なされた。冬眠から目覚めて塚から出てくる来る蛇を見た古代の人びとは，墓中の故人そのものと見なしたと思われる。蛇は地上を這うと同時に空中を浮遊した。そこで蛇も有翼と見なされた。前述したように，ササン朝の連珠文は起源は蛇文様と考えられる。連珠文の中に真珠の首飾りをくわえた鳥を配するが，これは有翼蛇の名残りであることもすでに見てきた。真珠をフワルナ（栄光）と見る従来の学説は採らない。

トロイア陥落後，新トロイア（ローマ）を建設するため，トロイアの英雄アエネアスは7隻の船と共に7年間海上を漂泊し，シシリー島に着いた。そこからイタリア本土に渡ろうとしたが台風に翻弄され，リビアのカルタゴに到着し，女王ディードーの好意を受ける。アエネアスはディードーにそれまでの冒険を語る。ディードーは妻を失ったアエネアスと狩場で結ばれ，2人でカルタゴを経営しようと思う。しかしアエネアスは新都ローマ建設のためイタリアに出帆する。ディードーは高く積まれた薪の山の上で，アエネアスから贈られた剣で身を刺して自裁する。アエネアスは背後にディードーを焼く薪の火に映ずるカルタゴ城を見ながらイタリアを目指すが，嵐にさいなまれ再びシシリー島に漂着する。ア

エネアスは，この島に祭られた父の墓前で，各種の競技を催した。アエネアスはその母ビーナスの聖木である桃金嬢（てんにんか）を額に巻き，墓前に葡萄酒，乳，犠牲の血を灌ぎつつ祈った。そのとき，墓の下から巨大な蛇が現れ墓を抱き，供物を口にしたあと墓の下に入っていった。アエネアスは，この蛇はこの場所の精（父の霊魂）あるいは父の使いの者と見るべきかいぶかりながら，さらに羊，豚，牝牛の子を供犠し，父の魂と死者たちの魂を呼んだ(『アエネーイス』泉井久之助訳，第5巻，『ウェルギリウス・ルクレティウス』世界古典文学全集，第21巻，筑摩書房，1965年，91－2頁。『アエネーイス』上，泉井久之助訳，岩波文庫，1976年，278頁)。

アエネアスの父の墓から出現した大蛇に羽が生えていたという記述はない。しかし，アエネアスが供犠した牝牛の子の背中は黒かった。エジプトの聖牛アピスは黒白のまだら牛で，背中には黒い毛でできた翼の文様がついていた。美術では肩と尻の所に背中から両脇に翼の文様が垂れ下っている。アピスは冥界の王オシリスの化身である。チェンバレンは『日本事物誌』で，前述したように，1897年（明治30年），孝明天皇の皇后の大葬が行われたとき，墓を掘る人びとは黒い翼を持つ鳥のような服装をしていた，といっている。中国の慣習では，映像で見る限り，墓掘り人は濃紺の同じような服装をしている。エジプトの冥界の王であるオシリスが青い顔をしていることと関係のある色であろう。中国の死者は口中に蟬を含み，エジプトの死者はスカラベを含む。オシリスの遊離魂であるバは毎夜墓室の穴から出て外部に浮遊する。アエネアスの父の化身である蛇も有翼であったと考えられる。この蛇は場所の精とも呼ばれている。ローマのゲニウス・ロキ（場所の精）はギリシアのダイモン，ヘブライのケルビムと同じように有翼で表わされた。ギリシア神話において，境界神ヘルメスが持つケリュケイオン（ローマ神話ではメルクリウス神とカドゥケウス）は左右に2匹の蛇が8の字型に巻きつき先端に2つの翼がついた杖である。ヘルメスは元来，海岸にある岩礁で，この世とあの世の境界とされた。2匹の蛇は境界石の上に立てられた祖先柱に巻きついて出現する祖霊で，上昇と下降を表象した。この蛇も別の観点から見ると場所の精そのものであった。

ヘロドトスは翼のある蛇を調べるためにアラビアのある地方を訪れた。そこには大小さまざまな蛇の骨の堆積が見られた。これらの堆積は狭い山間の峡谷が広い平野に開けようとする場所にあった。春になるとこうもりの羽のような毛のない翼のあるこれらの蛇は，アラビアからエジプト目指して飛んでゆくが，イビス（トキの一種）が入り口の所で蛇を殺してしまう（『歴史』2.75－6）。イビスが噛み殺した蛇が堆積をつくったのではなく，この堆積は人間の手によって殺された蛇の死骸の山であった。蛇はあの世の精力を地上に運んでくるものとされ，春になって冬眠から覚め地上に現れたとき捕獲され，頭部を石で叩きつぶされた。殺された蛇の死骸はごみとして1か所に捨てられた。くねった背骨とその左右についた半円型の無数の肋骨の堆積ができた。エジプトにとっての異界は，リビア，ギリシア，エチオピア，アラビアがあったが，来訪する祖先霊は国境で迎えた。山の峡谷の出発点には祖先の住む冥界があったのであろう。峡谷が平野に開ける場所は一種の境界で，死骸はそこに捨てられたのである。ごみとしての骨の堆積が新たな聖地に変容し

た。潰された蛇の頭の骨は左右に開いた翼状に見えたと思う。これがカドゥケウスの原型になったと考えられる。

ヘロドトスはいう。アラビアでは乳香，没薬，カシア（肉桂の一種），シナモン，レダノンが生成する。アラビア人は没薬を除いてこれら香料の採取には容易ならぬ苦労をする。アラビア人は乳香を採取するのに，ステュラクス香を焚く。乳香を産する木にはどの株にも形は小さいが色とりどりの有翼の蛇が無数に群がってこれを守っているからである。この有翼の蛇はエジプトから飛来する蛇と同類のものである（前掲書，3.106）。有翼の蛇は香料，ことに乳香を製する樹脂を出す木に群がるという。蛇がこの種の樹脂（の匂い）を好むためかも知れない。日本の古来の俗信では，刈り取った頭髪は焼いてはならないとされる。その匂いに引かれて蛇が寄ってくるからだといわれる。蛇の体が発するあの悪臭から類推した結果，そういわれるようになったのかも知れない。ヘロドトスは蛇を追放するためにステュラクス香を焚くという。ステュラクスの樹脂や香は2級品でアラビアの特産品としても挙げられてない。その焚かれた匂いは芳香といえるものではなく，悪臭を放つ蛇も辟易するものであったと思う。日本の俗信では，髪の毛を焼いた悪臭に蛇が寄ってくると伝えられるが，本来は蛇も辟易して逃げたのではなかろうか。つまり蛇避けのために焚いた時代があったと思われる。

鈴木棠三『日本俗信辞典　動・植物編』（角川書店，1982年）によると，蛇を家に入れないために香の花や線香を焚く。山道をゆくとき，ショウガ，ジャコウ，ユオウを粉末にして腰に帯びれば蛇は逃げ去る，という（523頁）。アラビアと同じように，蛇は香料と関係のある動物であった。ある種の香料は蛇を引きつけ，ある種の香料は蛇を追い払った。起源的には墓前で焚いた香と祖先の化身である蛇にまで遡る。死体が腐敗を始める時期の臭気を消すために香料が用いられたという説に従えば，死者の化身であり同じような臭気を発する蛇が香料と関係を持ったことは理解し易い。蛇が特定の香料を忌避するのは東西の文化で共通して見られる現象である。香料は死臭を消すためにだけ用いられたのではなく，香が持つと考えられた死者を賦活する生命力を与えるために焚かれたと考えられる。このことについては，以前論じたことがある。

蛇は祖霊であるので有翼であった。アラビアの蛇は春になるとエジプトに飛来し殺害されたあと人びとに力を与えた。日本の寺院や神社に見られるしめ縄も蛇であるという説があることは前述したが，翼の表象は縄の中央に垂れた裏白と四手ではなかったかと思う。正月飾りが古代ペルシアの有翼円盤の伝播したものであることは述べたが，横に張ったしめ縄が蛇を表わす。日本からヨーロッパにかけて，蛇または竜は有翼で伝承されている。『アジア遊学』28，特集ドラゴン・ナーガ・龍（勉誠出版，2001年）に竜や蛇の図像が多く見られる。裏表紙に櫻井龍彦の撮影による北京の頤和園の玄関にある清代の銅製の竜の写真がある。この竜は前脚と後脚があり，各脚には皇帝関係の竜であることを示す5つの爪がつく。前脚の付け根に形ばかりの羽根がついている。前掲書，63頁，図4の竜は有翼3爪で非皇帝関係の竜である（櫻井「開発と災害伝承のなかの龍」）。殷周青銅器や玉器の虺竜文（きりゅうもん）には羽根のついた竜蛇が見られるので有翼の蛇は東西に分布していることが分か

る。イランのエジュダハーは前脚だけで，付け根にコウモリの羽根のようなものがついている。後脚はなく後半部は蛇体である。ミニアチュールに描かれたエジュダハーは4脚で有翼のものとそうでないものがある（奥西峻介「エジュダハー」）。ドイツには竜系と蛇系の2つの竜がいる。竜はいずれもドラヘといい，英語のドラゴンと同系のことばである。竜系の竜は飛竜と呼ばれ，前脚だけがつき，その付け根にコウモリの羽根のようなものがついている。蛇系の竜も飛竜と呼ばれ，脚はなく翼だけがある（竹原威滋）。

アラビアの香木を守る有翼の蛇の伝説は，エネルギーを持って春に異界から群行して来訪するまれびとと生命の木の複合の変異形である。別の個所で有翼円盤がアジアとヨーロッパで季節の変わり目に揚げる凧となったことを論じた。円盤の周りの円環が祖霊を表わす蛇であることを証明した。また，円盤も蛇も祖霊の表象であることも見てきた。ドイツ語で竜は單数形はドラヘといい，複数形はドラヘンという。ドラヘンは単数扱いで凧を意味する。竜の頭に当たる凧の本体に，いくつもの小さい菱形の凧が竜の尾（ドラヘンシュワンツ）状に空中に舞う。季節の変わり目に群行して来訪する祖霊の表象として飛竜を用いたのは優れた考えであった。円形あるいは四角形の本体に脚をつけて揚げる凧は，もう1つの飛翔する祖霊の表象である。

古代中国の有翼の竜に応竜（おうりゅう）がいた。寺島良安『和漢三才図会』7（島田勇雄，竹島淳夫，樋口元巳訳注，東洋文庫，1987年）は中国明代の王圻（おうき）『三才図会』から引用していう。むかし蚩尤（しゅう）が黄帝と戦ったとき，黄帝は応竜に翼の野に攻めさせた。女媧は畜車に乗って応竜を屈服させた。禹が水を治めたとき，応竜に命じて尾で地に字を画かせ，それで水の守りとした（10－1頁）。『三才図会』の応竜の記述から推測すると，それは黄帝や女媧や禹王の他我であったと思われる。『三才図会』の原文を見ると，「昔蚩尤禦黄帝，帝令応竜攻于翼之野」とある。禦は防禦することであり，呪力から身を守ることであるので，蚩尤は戦闘の神であるにも拘らずその立場は受動的である。翼之野というのは漢学の注釈ではどうにもならないものである。この戦場で，黄帝は自分の祖霊である応竜を描いた旗を立て蚩尤を殲滅した。応竜の旗が戦場に満ちていたのでこの地名が生じたのであろう。

女媧は三皇の一人で人面蛇身の地母神と考えられ，蘆の灰で洪水をしずめた。原文では「女媧之時乗畜車，服応竜」とある。蛇身の女媧は応竜を服属させたとあるが，応竜はのちの女媧の対偶となる伏羲（ふつき）の祖型であろう。畜車がどんなものかはっきりしないが，人面の女媧がさまざまな祖先獣の引く車に乗って，自分の他我である応竜と合体したことを表わしている。女媧と伏羲は兄妹であるとか夫婦であるとか後世にいわれるようになるが，その問題はここでは論じない。ただ両者の上衣の袖がいずれも三角形であることに注目しなければならない。この人面蛇身像は有翼であったことが分かる。夏王朝の始祖禹王は治水を成就するとき，祖霊の応竜の力を借りた。原文を見ると「禹治水有応竜，以尾画地即水衛」とある。応竜は尾で地面に絵を描いたのではなく，堤防のような区画をつくったのであろう。すると洪水が自然とその区画の中に収まったと解釈できる。

古代中国の有翼竜は帝王たちの他我としてこの世を訪れ帝王たちの功業を助けた。古代西アジアでは王宮の入口や王の彫像の上に有翼円盤や有翼円環（蛇）が見られた。これら

の図像は墓の入り口や墓室内にも見られた。日本の正月飾りにも同じように，祖霊のもたらす活力を受けて再生する観念を見てきた。ギリシア西方のイオニア諸島のレフカス島の古俗では，島の南端にある白堊の断崖から毎年，島民たちは罪人を贖罪のいけにえとして海に突き落とした。この場所は恋人の飛び込み場と呼ばれた。人びとは，罪人の墜落をやわらげるため，その身体に生きた鳥たちや羽根を結びつけた。海上には一団の船が待ち受けて彼を受け取り，境界の向こうまで運び投棄した。この場所にはかつてはアポロンの神殿があり，レフカス島民による年１回のアポロンへのいけにえの儀式が行われた。ギリシアの他の地方でも，毎年若者を海に投棄する習慣があり，その際「汝，我われのくずであれ」という祈りのことばを唱えた。この儀式は人びとから災いを取り除くと考えられた。

別の解釈によると，この儀式は人びとが海の神に対して負っている借りを返済するものであった（J.G. フレイザー『金枝篇』第６部『スケープゴート』ロンドン，1913 年，254－5 頁）。スケープゴートにされる罪人は海上に落下する衝撃を軽減するために小鳥や羽を身につけられたとあるが，そうではあるまい。殺される罪人は，毎年１度，あの世から飛来する祖霊とされ，島の住民らに力をもたらすと考えられた。力を与えた祖霊は羽根をつけてあの世に帰っていった。本来は天神ゼウスの子アポロンの再生賦活のために祖霊が神殿を訪れたのである。他の地方でも若者を供犠したが，それは若神アポロンの他我で，若神を賦活するためにやってきた祖霊であった。活力を出した祖霊はくず同然になり，人間の穢れや罪を積み込んであの世に帰っていった。この世とあの世は全てがあべこべになっており，かつて論じたように，あの世では腐肉，罪穢れがご馳走になり，この世ではあの世の排泄物が活力となる。いけにえは海産物の豊穣のためでもあった。島の人びとが海から授かった海産物を海の活力の減少と見なし，その復元を願って活力に満ちた若者を供犠したのである。

ギリシアでは死刑囚のほか捕虜，奴隷，名門の男児，聖婚によって生まれた男児が供犠された。この慣習はギリシアに限らず古代メソポタミア以来の伝統であった。レフカス島では毎年１人の罪人を供犠したが，他の地方では毎年若者を供犠した。罪人にこの世を訪れる祖霊を演じさせる場合と実際に罪人を処刑する場合，同じような有翼表象を取った。中世ヨーロッパでは絞首刑や逆さ吊りの刑を執行するとき，受刑者の衣服を脱がせ，目を布で覆った。後になると下半身に衣服を着けたまま行われたが，手は後手で縛った。古い慣習では頭を剃り，身体全体にタールを塗って鳥の羽毛を一面につけた。この慣習は H.V. ヘンティヒ『刑罰』（ベルリン，1954 年）のいうように非常に古く，現代でも北アメリカでときに見られる慣習である（阿部謹也『刑吏の社会史』中公新書，1978 年，50 頁）。H.V. ヘンティヒによると，頭髪を剃るのは本来，力を抜くための呪術であり，タールを塗り羽毛をつけるのは供物にされたしるしである。なお，タールの臭気は魔物を防ぐためのもので，長い間ペストの予防に効果があると信じられてきた。本来タールを塗ることは，人間に有害な罪深いものを清め，その毒を中和させることを意味した（阿部，前掲書，51，55 頁）。

この中世ヨーロッパの処刑の仕方の前史には，有翼の祖霊をあの世に送り返した慣習が

あると考えられる。生きた鳥をいくつも身体に縛りつけて落下の衝撃を軽減しようとしたのではない。身体中にタールを塗ってその消毒力で罪人の死体を悪霊から守りかつ清めたと当時の人びとは考えたかも知れないが，黒い身体は腐敗が進行した死体の色である。身体じゅうにタールを塗るのは，生きている罪人の場合はこの世において皮膚呼吸を停止し窒息させることであり，処刑によって完全に死に至らしめた。タールはさらに鳥の羽根を貼りつけるのに適していた。20 世紀初頭，米国南部で小学校教師がリンチを受け，身体じゅうにタールを塗られ殺された。このことは米国史を読んで記憶に残っていることであるが，この女性教師は伝統的な処刑の方法に従って死体と同じ色にされて殺され，あの世に送られたのであった。

処刑される者は髪の毛を剃られた。それは力を抜くための呪術であったという。この世とあの世は全てあべこべになっているので，力を抜き取られたいけにえは，あの世では力の溢れた他我として，あの世の神に嘉されたであろう。『旧約聖書』「士師記」が伝える怪力のサムソンと遊女デリラの話は以下のようである。サムソンの母は本来不妊の女であったが，神の使いが彼女に現れて男子を生むであろうと告げる。その際，使者はこの子はナジル人（選り出された人）として神に捧げられているので，髪の毛にかみそりを当ててはならないといった。そのほかに，葡萄酒を飲むこと，人間の死体に近づくことを禁じた。サムソンは長じてソレクの谷で愛人デリラとねんごろになる。サムソンの敵ペリシテ人はデリラにサムソンの怪力の根源はいずこにあるのか探らせる。デリラはサムソンから秘密を聞き出そうとするが，いつも騙されて聞き出せない。とうとうサムソンは，自分は神に選ばれた人であるので，頭髪にかみそりを当てたことがない。もし，髪の毛を剃られたら身体から力が抜けて並の人間のようになると教える。デリラはサムソンを膝の上に眠らせ，髪の毛 7 房を剃らせた。ペリシテ人はサムソンを捕えて両眼を抉り，神殿に連れてゆき曝し者にした。サムソンの髪の毛はその間少しずつ伸びてきていたので，左右の手で 2 本の柱を摑んで揺さぶると神殿は崩壊し，多数のペリシテ人と共に王も下敷きになって死亡した。サムソンも多くのペリシテ人の死体のそばで死んでいった（第 13 章－第 16 章）。神の使いがサムソンの母にいい渡した 3 つのタブーを犯したためであった。

サムソンは神に捧げられる人として髪の毛にかみそりを当てることはなかった。怪力サムソンの容貌は髪の毛が伸び放題のままであった。自然人を見ると調髪しなくてもある限度内にとどまるようである。中近東の旅行者の記録を読むと，王の葬儀に参列する臣下の者は，髪もひげも伸び放題にし衣服を裂き爪で額をひっ掻き血まみれになった。王の遺体はイスラム教徒の場合，髪とひげにかみそりを当て神の許へ旅立ったであろう。多くの宗教では，入門者に象徴的にかみそりを当てるだけになったが，あの世に参入するときは実際に剃ったのである。

古代日本では大陸との交通の外洋船に持衰（じさい）という人物を配置した『後漢書』東夷，倭国伝や『三国志』魏志，倭人伝に出る持衰は，航海中櫛を入れることも沐浴することもなく，肉を食べず婦人を近づけることはなかった。もし持衰が病いに罹り船内に危害が及ぶときは，持衰が物忌みをしなかったと見なして直ちにこれを殺し，海に投入した。衰というの

は，白川静『字統』によると，死者の襟もとにつける呪飾であった。衰はスイと発音すれば「おとろえる」を意味する。サムソンがデリラに髪の毛7房を剃り取られ，力が抜けたのを想起させる。衰の字には異常な力を発揮する屍衣ひと切れとその対極の無力が併存している。「乱臣」には国を治める臣と国を乱す臣という2つの意味がある。このような反訓は受や買にもみられ，その対極の意味は授や売で表わすようになる。持衰は物忌みする聖なる人物であるので，その恩恵によって船とその乗員全体が平安に保たれたのであった。もし暴風が生じたり船内に病人が続出するようなことになったら，人びとは持衰を力のない者として殺害し海に投じた。その際，持衰は船のへさきで頭髪やひげを毟り取られ着衣を裂かれたと考えられる。持衰は船と人びとにエネルギーを放出しつづけるが，その霊能が衰えて船内に病人が出たりして秩序が失われると，境界であるへさきで持衰を供犠したのである。持衰はあの世から持ってきた力を全て出し切ったあと衰えてあの世に帰っていった。

持衰は有翼であったと考えてよい。蓑笠（みのかさ）は日本ではあの世からの訪れ人の着衣であり，葬儀における死者の着衣であった。神話ではスサノヲノミコトは高天原から追放されるとき，ひげと手足の爪を抜かれ千座（ちくら）の置戸（おきと）を背負わされたとある。そのときスサノヲは青草を束ねて蓑笠とし神々に宿を乞うた。スサノヲが天空から地上の中つ国に追放されたとき身に着けた蓑は，近代の西洋の防寒着のケープのような肩を覆うものと胴から下を覆うスカートに相当するものから成っていた。『字統』によると，衰は屍衣を着けた死者が胸につける黒い喪章の布である。『説文』には長さ6尺，幅4尺とある。麻の組紐で結ぶ(485頁)。柳田国男監修『民俗学辞典』（東京堂，1951年）の「簑」の項に載せる挿し絵を見ると，簑（蓑の異字体）の頸部は紐で結ぶのであるが，胸飾りをつける位置に記章をつける。飛越地方ではバンドリと呼ぶ蓑が広く使われているが，雀のことをバンドリスズメという所もあって簑を着た姿が雀に似ていることからきた名称らしい。秋田県のナマハゲを始めとして小正月の夜の訪問者が簑を着けてくるのは，信仰を背景にした古くからの約束であるらしく，遠い国から旅をしてくる神の服装だろうともいわれている（558頁）。蓑を着た人が雀に似ているといわれるのは，あの世からの来訪者が有翼であることを物語る。持衰はあの世に帰るときは海に投入されるが，象徴的に天国に帰ることである。持衰は供犠されるとき，記録にはないが，蓬々と伸び放題になった頭髪やひげを毟り取り，手足の爪を剥がれて神の許に送られたのであろう。それは乗船者たちの苦痛を一身に背負わされた姿である。衰に両義があるのが見て取れる。

スサノヲノミコトは高天原から追放されたとき，千座の置戸を背負わされて降下した。千座は無数の台座あるいは祭壇であろう。問題は置戸である。祝詞「六月（みなづき）の晦（つごもり）の大祓（おほはらへ）」十二月（しはす）はこれに准（なら）へ（『古事記　祝詞』（日本古典文学大系1，岩波書店，1958年，所収）によると，多くの天つ罪と国つ罪の全部を出しつくしたとき，木の上下を切りとった中間の木を細かく切ったものを千座の置戸に置いて祝詞を宣べれば，天つ神は天の岩戸を押し開け，国つ神は高い山，低い山の頂でお聞きになるだろう（425頁）という。木を切り刻んだチップは各人の罪・穢れを象徴したのであろう。このような無数のチップを背負って祝

詞をあげれば神の耳に入って人びとは罪・穢れを祓われて再生するであろうという意味である。置座は祭壇に置く各人の罪・穢れを象徴するチップのことであった。神はこの祓え物の供物を聞こし召して再生し，それを運ぶ者も再生する。スサノヲノミコトの場合，千座の置戸とある。『日本書紀』上（日本古典文学大系，岩波書店，1967年）補注1－86「千座置戸」では置戸と置座は同じ意味であろうという（562頁）。松岡静雄『日本古語大辞典』語誌（刀江書院，1970年＜1929年＞）では，置戸の戸は事，物の意で置き物というくらいの意味であるという（309頁）。

エジプト学には見せかけの扉，あるいは偽扉（にせとびら，ぎひ）という概念がある。エジプトでは古王国時代から既にこの概念があった。墓や葬祭殿の壁はこの世とあの世を区切る境界で，壁に設けられた四角い凹み（壁龕）に供物を供え，あの世の霊魂を供養した。霊魂（カ）は壁の反対がわに出てきて供物を食べると信じられた。この場所に，実際は開け閉めできない小型の木の扉や石の扉が設けられた。功臣は死後，王から扉が授与された。偽扉の前には祭壇があり，祭られる故人の偶像がその横にあり，姓名や供養文が添えられていた（『古代オリエント事典』「偽扉」，畑守泰子，岩波書店，2004年，648頁。村治笙子著，仁田三夫写真『古代エジプト人の世界』岩波新書，2004年，157頁）。エジプトの偽扉と同じ物が敦煌の莫高窟（千仏洞）の第17窟にも見られることは以前に論じたことがある。持衰あるいはスサノヲノミコトはあの世に旅立つ人物で，エジプトでいえば偽扉の所に座す人物に相当する。置戸というのがこの偽扉にあたるのである。持衰やスサノヲノミコトに代受苦（代死）してもらい，扉の前に供えた供物が破片化された木屑で象徴された。日本にも神代にすでに見せかけの扉をつくって死者を供養する習俗があったと考えられる。日本における観音開きの仏壇や何十年に1度のご開帳をする秘仏の仏壇の中にエジプトの偽扉と同じ形式を見ることができる。中国清王朝の役所では，毎朝壁に設けられた扉に向かって礼拝した。扉の向こうには太祖以降の歴代の皇帝の位牌が安置してあったが扉を開くことはなかった（中川忠英著『清俗紀聞』1，2，孫伯醇，村松一弥編，東洋文庫，1966年）。

季節の折り目に空に揚げる凧のことを日本ではタコと呼んだりイカと呼んだりする。タコやイカを干すと，円い頭や三角の頭に多くの脚がついた形になる。古い時代は，この形を蓑や蓑笠に見たてたにちがいない。蓑笠は日常的に寒さや雨風を凌ぐために着用したが，神話や葬送では神や死者が着る衣装であった。木綿の衣装や毛皮の衣服が十分に発達する前の，いわば始原の衣服であった。祖先は蓑笠姿であの世とこの世の間を去来する時代があった。それは単に日本に限ったことではない。神代において既に蓑笠が廃れ始めた世界では，この世の人ならもう着用しないぼろ着をまとって，乞食のような姿でこの世を訪れてくる。乞食姿の訪問者に人間がどう対応するかが試される。

東大寺正倉院の宝物に「鳥毛立女屏風（とりげりゅうじょびょうぶ）」六扇がある。各扇とも紙本粉地に樹下の唐風美人1人を表わす。美人は3人は立ち，3人は石に腰をかけている。この美人図は，もとは彩色と共に鳥毛を貼って仕上げられていた。顔，手，袖口のほかは，墨線のみで彩色のないのは，貼られていた鳥毛が剥落して下絵が露出したためである。画面の鳥毛は婦女像

の衣服や頭髪にだけ貼られていただけでなく，岩石や樹木にも貼られていた。婦女の化粧は唐の女俑や中央アジア発見の美人画に見るごとくである。鳥毛は日本産のヤマドリの羽毛と鑑定されている。このように樹下に人物を配する構図は，ササン朝ペルシア芸術の樹下禽獣文様，インドの樹下に薬叉女を配する意匠に起源を発するといわれている（『正倉院宝物』北倉，朝日新聞社，1987年，図録No. 88－No. 99，総説38－9頁）。

正倉院の鳥毛立女屏風から始めて，中国の樹下美人，敦煌の樹下美人，西域の樹下美人，イランの樹下美人，インドの樹下美人，樹下美人図の源流について多くの図録と共に論じた森　豊『樹下美人図考』（六興出版，1974年）がある。正倉院には樹下禽獣図として「鹿草木夾纈屏風，鳥木石夾纈屏風，古人鳥夾纈屏風，鳥草夾纈屏風，象木臈纈屏風，羊木臈纈屏風，熊鷹臈纈屏風，鸚鵡武臈纈屏風」（前掲『正倉院宝物』北倉，No.103－No.110，総説40－2頁）がある。また「鳥毛篆書屏風」六扇は君主の座右銘を記すものであるが，各々の文字を篆書と楷書を交互に並べ，篆書は小さな鳥羽を貼り重ねて表わし，その上の所どころに金箔を散らし，楷書は地色から抜き出し別の色を吹きつけて浮き立たせている。6扇のうち，第1，第3，第5扇の地色は緑青で楷書に丹色を，第2，第4，第6扇では地色は丹色で楷書に緑青を吹きつけている（前掲書，No.84－No.87，総説37－8頁）。またNo.100とNo.101では，第1，3，5扇を緑青塗り，他の3扇を丹塗りとする。楷書の銘文だけで，各文字は鳥の羽毛を貼り重ねてある（39－40頁）。これら屏風の文字に用いられた羽毛は日本産のヤマドリやキジのそれぞれの部位の羽毛を用いている。

6つの扇面のうち3つが緑青で他の3つは丹色であるのは単なる装飾の色彩ではなく，死と再生の宇宙論的な色彩である。韓国の太極旗は青と赤の陰陽二元から成る。文字に篆書と楷書の別のある場合は篆書にだけ羽毛を貼り，楷書には地の色と対極の色を吹きつけて浮き立たせる。楷書のみの場合は楷書の文字に羽毛が貼りつけられる。紙本と文字の色，羽毛で二元論的世界観を表現しようとしたことが分かる。羽毛が日本産の鳥のものであるのはどう解釈したらよいのであろうか。外国の工人が制作し，羽毛は現地調達した結果なのか，羽毛ばかりでなく工人も日本人であったことを物語るのであろうか。陰陽の観念，二元論的世界観，死と再生の観念は上流の間では既に定着していたことが分かる。

問題は鳥毛立女である。6人の女性は3人は立ち3人は座すので二元論的である。しかし6人とも着色してある顔，手，袖口以外には一様に羽毛が貼ってある。唐風女性を描いてあるこれら6扇も，それを制作した工人は外国人か日本人かは不明である．日本で制作されたことは間違いない。人物や樹木や岩石に羽毛を貼りつける手法は単なる装飾とは考えられない。非日常的な世界を描いたものと考えられる。生命の木と女性の組み合わせを考えると，女性は生命の水の管掌者である地母神であろう。同時代の文化財に例を採れば，東大寺二月堂の閼伽井屋の横にある小祠に祭る鬼子母神は奈良仏教で崇拝された訶梨帝母（梵語ハーリーティーの音写）で，無数の子を持つ豊穣の女神であった。左手に幼児を抱き，足許に何人かの幼児をめぐらせる図像は，地母神にさかのぼる幼児イエスを抱く聖母マリアの図像と同系のものである。100年前の飛鳥の酒船石遺跡も二月堂複合と同じものであるが，ここにも当時何らかの建物があったと思われる場所があり，そこには石敷

きがない。この建物は柱穴などの出土報告はない。東大寺の閼伽井に現在のような覆い屋がつき秘匿されるようになったのは鎌倉時代以降である。鬼子母神祠も本来は神像のみであった可能性がある。しかしこの小祠が水の女神の拝殿であったとすると，もともと社屋があったとも考えられる。酒船石遺跡における二月堂の鬼子母神祠に相当する場所は3坪ほどの長方形で敷き石がない。飛鳥時代，ここに女神が祭られていたと考えられる。生命の木である槻の木と流出口が2つある生命の水と，方形と円形の石の水槽の管掌者として女帝斉明天皇を女神に擬したとも考えられる。

祭祀者としての女帝あるいは巫女は，樹下美人としての当時の流行着としてでなく，この世とあの世の境界での存在として羽衣を身にまとい，有翼表象を現出したのである。奈良時代の鳥毛立女の絵画では，樹木も岩も羽毛で荘厳された。これは100年前の飛鳥時代でも同じことがいえるであろう。ヨーロッパからアジアの東端，東南端にわたって広く見られる羽衣説話に関しては，かって考究したことがある。羽衣説話では，天女が天から数羽の白鳥の姿で地上の池に飛来し，羽衣を脱いで人間の姿になって水浴する。それをかいま見た男によって末の妹の羽衣が隠される。姉たちは羽衣を身につけて飛び去る。末娘は男と結婚し，子供らを儲ける。妻は夫の留守中，羽衣を探し出して天に帰る。夫は妻のあとを追い天に昇り，妻の親にも会い地上に連れ帰る。夫が王の場合は，天上の王国と地上の王国を領有して栄える。羽衣説話では天と地の結婚と全体性の回復が語られる。鳥毛立女はこのような思想的背景のある絵で，聖武天皇所蔵の場合は，女性は光明皇后に擬せられるものである。六扇屏風は天皇の居室に常に置かれたものであった。これによって天皇は天地四方の安泰を確保できたのである。

天皇自身も毎年羽衣を着て水浴し皇位を新たにした。旧暦11月下旬の卯の日に行われた新嘗祭には御湯殿（おゆどの）の御作法がある。神嘉殿（しんかでん）に神座が舗設され，南枕で八重畳の上に御衾（おふすま）がしつらえられ，南に坂枕（さかまくら）が，北に御履（おくつ）が置かれる。御衾は内侍（ないし）の奉仕とされた。そのあと御湯殿の御作法がある。天皇は天羽衣（あめのはごろも）を着して御槽（おふね）に入る。天羽衣は明衣（みょうえ）ともいわれまた御帷とも呼ばれ，槽から出たときは別の御帷を奉ってお拭いした。御槽は長さ5尺2寸，幅2尺5寸，深さ1尺7寸あった。浴後は白色生絹の御祭服を着用した。天皇即位後の最初の新嘗祭は大嘗祭と呼ばれ，悠紀殿と主基殿が建てられた。この両殿は固定した位置には建てられず，天皇によってその場所は異なった。大嘗祭では天皇は悠紀殿から布を敷いた筵道を通って廻立殿（かいりゅうでん）に至り御湯殿の御作法ののち悠紀殿に戻った（川出清彦「新嘗祭神膳のことについて」，小川省三「大嘗祭に関する記録」『新嘗の研究』1，にひなめ研究会編，学生社版，1978年）。

天皇は天の羽衣を着して水浴するが，これは羽衣説話で伝えられる天から飛来する白鳥の再現である。白鳥は羽衣を脱いで人間の姿になり水浴する。天皇は水浴から出て人間の姿になる。水槽から出た天皇は，別の乾いた羽衣で身を拭い斎服に着替える。この儀式で天の子である天皇の再生儀礼の第一歩が始まる。天の羽衣は明衣とも呼ばれた。明衣とはあの世の衣服のことで，天の衣服を指す。濡れた衣服と乾いた衣服の2つを身に当てるのも儀礼的実修であったに違いない。天皇が身を漬ける御槽は葬儀で用いる湯灌用の湯舟に

当たる。葬儀では沐浴した死体は明衣である屍衣を着用して乾いた棺に収める。新嘗祭・大嘗祭と葬儀は，死と再生の同一の通過儀礼である。新嘗祭はその年に穫れた新穀を冬至（前後）に天皇が神々に供え，自らも摂る儀式である。翌年の2月初めの立春とは別に冬至新年があって，天皇は新しい穀霊を摂って再生した時代があった。この儀礼は中国から入って来た嘗祭に則ったので，暦の上での新年も入ってきたと考えられる。

別に神嘉殿で6月と12月の11日に行われる神今食（じんこんじき）がある。神今食では，新嘗祭が新穀を用いたのに対し，旧穀を天照大神に供え天皇自らも摂った。12月15日がさらに古い時代の年の変わり目で，その時に天皇は旧穀と新穀を摂って死と再生の通過儀礼を行ったと考えられる。おくれて新嘗祭が入ってきたのではないかと思われる。その結果，12月11日に摂った旧穀と新穀のうち，新穀を摂る儀式が11月に前倒しになったのであろう。6月11日の神今食も旧穀を摂るだけになったのであろう。あるいは全く別のことが考えられる。冬至正月の方が立春正月より古く，冬至正月に旧穀と新穀を摂る行事があったが，立春正月が導入されてからは冬至正月に新穀のエネルギーを摂る本来の姿が残り，立春正月にいちばん近い満月の日である12月15日の前の12月11日と6月11日に旧穀を摂る儀式が残ったのではないかと考えられる。イスラム教のメッカ巡礼は，イスラム暦12月8日から10日まで中心的な儀礼が行われるが，7日から13日までが広い意味での巡礼の期間とされる。10日から13日の犠牲祭が終わると同時に帰郷の途についた。前イスラム時代は12月15日が古い新年とされたので，新年前に大挙してカアバ神殿に参拝するのは，神から再生の力を得るためであった。イスラム教は異教時代の習慣を引き継いだのである。日本でも古来12月13日を新年とする風習があり，現在もその名残りがある。

『プルターク英雄伝』12（河野与一訳，岩波文庫，1956年）にいう。ダリウス2世が死んでしばらく経ってから，アルタクセルクセス2世はパサルガダイに出かけて，ペルシアの祭司から王としての秘儀を授かろうとした。そこには戦争の女神の神殿があり，女神はアテーナーに擬せられた。アルタクセルクセスはこの神殿に入り，自分の上衣を脱ぎ昔のキュロスが王になる前に着ていた上衣を着け，無花果の菓子を食べテルミントスを噛り酸乳をコップに1杯飲むことになっていた（「アルタクセルクセス」3）。王はキュロス大王が王になる前に着ていた上衣をまず着た。これは大嘗祭で天皇が湯槽の中に着て入る天羽衣（明衣）に当たる。王が一度脱いだ自分の上衣と着替えることによって正式にキュロスの王統を継いだ王になる。王の上衣は天皇の濡れた身体を拭う乾いた明衣に当たる。パサルガダエにある女神の神殿というのは，イランのペルセポリス宮殿の西北5キロメートルのナクシェ・ロスタムにあるいわゆるゾロアスターのカアバのことであろう。ペルセポリス東北43キロメートルの地点にあるキュロス大王の宮殿にも，ナクシェ・ロスタムのゾロアスターのカアバと同類の，現在は崩壊しかかったソロモンの牢獄がある。古代イランではナクシェ・ロスタムもパサルガダエであったが，アルタクセルクセス2世の即位儀礼はソロモンの牢獄で行われたことも考えられる。あるいは，大嘗祭の悠紀殿，主基殿の両殿と同じように，古代ペルシアでもこれら2つのカアバが用いられたかも知れない。古代ペルシアの即位儀礼は女神の神殿で行われた。大嘗祭では新穀を天照大神に供え，内侍が奉

仕する。古代ペルシアの即位儀礼では，新穀に当たるものは無花果の乾燥果実で，始原の食物に当たるものであった。酸乳（ヨーグルト）は白黒の濁酒（どぶろく）に相当する。

古代エジプトでは何十年に1回の割合で出現する聖牛アピスは子牛の姿で供犠された。頭部はナイル川に流されて水神に供えられたが，毛皮と肉は供犠者の間で処理された。美術では，アピスには肩から両脇にかけて翼の文様のある毛並があった。アピスにはさらに腰の両脇に同様の毛並があった。宗教史的に見れば，供犠された聖牛の生ま皮を被るのはファラオ（王）であった。王は翼の付いた衣服を着て再生したといえる。この有翼のアピスの毛皮は大嘗祭で天皇が着る天の羽衣に相当する。ファラオは天の子であるトーテムの聖牛アピスの肉を摂ることで再生した。大嘗祭での新穀，古代ペルシアのカアバ神殿での乾燥果実と同類と見なされる。アピスの血は大嘗祭の黒と白の濁り酒，カアバ神殿の酸乳に相当する。ヘロドトス『歴史』に次のような話が伝えられている。カンビュセスの子キュロス（キュロス大王の孫）はコーカサスを遠征したとき夢を見た。その夢にヒュスタスペスの長男ダリウスが両肩に羽根をつけて現れ，一方の羽根でアジアを他方の羽根でヨーロッパを覆った。この夢の意味は，キュロスがこの地で最期を遂げ，その王権がダリウスに移るということであった。キュロスは殺され，その首は血の入った袋に入れられた（1．209－10）。ダリウスもキュロスと同じアケメネスの部族に属したが，キュロス大王の血統ではなかった。カンビュセ王のあとキュロスに伝わるべきキュロス大王伝来の上衣（羽根のついた王衣，天の羽衣）が，アケメネス族の別の家系に属するダリウスに移ったことを意味した。まこと，事実はその通りになった。

イランの伝説では悪竜ザッハークが1000年間統治した。ザッハーク王の両肩には蛇がついていた。蛇は毎日2人の若者の脳を餌として与えられた。イランの王統を引くファリードゥーンの父も，ザッハーク王に捕えられ，脳を蛇に食べられてしまう。ザッハークは夢にファリードゥーンを見て日々悩む。幼児ファリードゥーンは牝牛ビルマーヤに育てられた。ビルマーヤは生まれたときは，雄孔雀のようでどの毛も異なる色をしていた。ザッハーク王はこの牝牛も殺してしまう。最後はファリードゥーンはザッハーク王を殺し，その首を切り取り王冠を奪い取った（黒柳恒男『ペルシアの神話』泰流社，1980年，40－68頁。岡田恵美子「近代ペルシア文学に見られる伝統的祭礼」『日本オリエント学会創立三十周年記念　オリエント学論集』刀水書房，1984年）。ザッハーク王の両肩には蛇が生えていた。蛇は本来は祖先の表象で，鳥の羽根と同じようなものであったが，悪の象徴とされるようになったのであろう。ザッハークは古代イラン語であるアヴェスタ語のアジ・ダハーカ「異国（敵）の蛇」のダハーカ「異国の」に当たることばで，ゾロアスター教時代，既に悪竜と見なされていた。古代や中世イランの王たちは，即位式で竜と闘い竜を殺して王座についた。竜は王家の祖先霊で新王にあの世のエネルギーをもたらすためにやってきた。やがて竜の本来の意味が忘れられ，臣下に誇示するための悪竜退治となった。

現代イランの民話に，主人公がライオンを殺し王女の命を助ける話がある。王女は後日の証拠としてライオンの血の中に手を入れ，主人公マレク・モハンマドの肩に血の手形を

つける。王の前に多くの男が現れ自分こそ王女を救出したと名乗り出るが，王女は証拠の血の手形をつけた主人公を王に紹介する。主人公はさらに，樹上にある霊鳥シーモルグの雛を食べようとする大蛇を真っ二つにし，自身は木の下で眠ってしまった。親鳥が帰ってくると雛が大声で鳴くので，下を見ると主人公が寝ていた。こいつが毎年雛を盗む犯人かと思った親鳥は仇を討とうとするが，雛のことばで真実を知る。主人公は望みがかなえられ，王女と結婚する（アンジャヴィー・シーラージー『イランの民話』1，テヘラン，1978年，162－7頁）。大蛇エジュ・デハーは悪王ザッハークと同系のことばである。主人公マレク・モハンマドは大蛇を殺して王権を手に入れる。百獣の王ライオンの血には強力な生命力が宿る。それを肩に塗ることは，塗られた者に生命力が移ることを意味する。王権移転のときのライオンの殺害は，王の祖先獣であるライオンを殺し，ライオンの持つ新しい生命力を新王が身につけるためであった。別の伝承では，前述したように王は別の祖先獣である竜を殺した。イラン神話の王権移転のモチーフが民話の中に変容して継続しているのである。アルメニア文化は古代イラン以来イラン文化の影響下にあった。伝説によると，人間の右肩にはその人の善行を記録する天使が止まっており，左肩にはその人の悪業を記録する天使が止まっているという。人が死ぬと，この2人の天使は記録と共にその人の魂を天使ガブリエルの許に届ける。ガブリエルは2つの記録を真理の秤にかける。善行の記録の方が重かったら魂は天国に導かれ，悪の記録の方が重ければ魂は地獄に落ちる（生森將人訳「アルメニアの民話」『世界口承文芸研究』4，大阪外国語大学口承文芸研究会，1983年，516頁，原注2）。

人間の両肩には天使が止まる。天使は守護神であり祖先霊である。（鳥の）羽根，翼，蛇と同じもので，アルメニアでは，2人の天使が善業と悪業を記録するようになっている。阿部，前掲書によると，ケルンでは大聖堂広場で裁判が行われ判決が下されると杖が折られ犯人が刑吏に引き渡された。刑吏が手を被告の右肩に置くと，その瞬間に被告は賤民である刑吏の手に落ちた。そのあと刑吏は聖ヨハン教会の傍の壁にはめ込まれていた青い石に被告の背を3回押しつけていった。「汝を青い石につけた。汝は父母の家に戻ることはないだろう」。そののち徒弟が被告を荷車にのせて刑場に連れていった（169頁）。死刑判決が下りると，被告を守護する祖霊の象徴である杖が折られ，祖霊の被護から見限られた。被告の右肩に賤民の手が触れると（マリー・アントワネットの場合もそうであった），被告の祖霊の力が刑吏に移ってしまった。教会の壁の青い石は阿部のいう通り境界石で，あの世に送り出す前の儀礼であった。18世紀の英国の文人サムュエル・ジョンソン博士は，幼時父親に連れられて町の境界石の所に行き，その石に座らせられ強く顔をぶたれたことを自伝で述べている。境界石を大人になっても忘れないようにとの父親の意向がそこにはあった。

田辺勝美「獅子肩旋毛文の源流」（『古代オリエント』第14号，NHK学園，1990年）に獅子の肩の旋毛についての重要な知見が見られる。野生の獅子のたてがみと胴体の境に旋毛文があり，それは動物学者が3歳以下の雄獅子に観察できるという。ガンダーラの獅子像は肩と尻に1個ずつ旋毛文がある。本来は肩に1個あったのが尻にもつくようになった

らしい。中国の獅子像はガンダーラから伝播したものであるが，旋毛文は数個以上に増大した。インドの獅子像にはこのような旋毛はない。ガンダーラが源流ではなく，西のパルティアか北西のバクトリアがその故郷である。エジプト古王国時代（前 2688－2181）の獅子像の肩には菊花文や二重円文がつく。新王国時代（前 1567－1085）になるとツタンカーメン王の大理石製枕の 2 頭の獅子像の肩にあるような旋毛文になる。わが国の獅子舞いの獅子の肩にある旋毛文が西アジアに由来することは間違いない（1 － 5 頁）。エジプトの聖牛アピスには，背中に黒い翼型の毛並があるとヘロドトスが伝えていることは前述した。美術ではアピス牛は肩と尻の両がわに翼文様が描かれているのも前述した通りである。アピス牛の尻の両がわの翼文様は，エジプトの獅子の尻の旋毛文が新しいものであるとする田辺説のように新しいものかも知れない。牛や獅子は王や国や州の祖先獣であったが，その肩に翼文や旋毛文があった。これらの文様は祖霊の表象に違いないので全て天の羽衣に通底するものである。ヨーロッパで発達した礼服や軍服その他の制服の肩章の各種は，日本の紋付きにつく紋と同じ祖霊の表象で，着用する者に安心感と威厳を与えるものである。近代の洋風オーヴァーコートには，肩章をつける場所に飾りのフラップをつけ端をボタンで留めてあるものがある。さかのぼれば古代の羽根にまでたどりつくものである。

玄奘はカービシー国（アフガニスタンのカーブル北東 70 キロメートルの所にある盆地）に至ったとき，先達からカニシカ王の伝説を聞いた。王城の西北 200 余里で大雪山（ヒマラヤ）に至るが，山頂に池があり，竜王が住む。昔ガンダーラ国に阿羅漢がいて常に竜王の供養を受けていた。阿羅漢が神通力で竜王の許に至ったとき，連れていった沙弥（しゃみ）（小僧）が竜王を殺し自分が竜王となった。竜王は暴風雨を起こし樹木を倒し伽藍を破壊しようとした。カニシカ王は竜を鎮めようとしたが効果がなかった。王はやむなく三宝に帰命して加護のあらんことを願った。たちどころに王の両肩に大きな煙と炎が起こり竜は退去し風は静まった。竜は帰順し命乞いをした（玄奘『大唐西域記』水谷真成訳，平凡社，1971 年，52－ 4 頁。前田耕作『巨像の風景』中公新書，1986 年，162 頁）。また，前田，前掲書に第 1 クシャーン朝のヴィーマ・カドピセス，第 2 クシャーン朝第 3 代のフヴィシュカ王を鋳た貨幣でも王が肩から炎を起こしているのが見られる。仏伝の中に出るいろいろの燃燈仏に関しては前掲書，165－74 頁に事例が見られる。各地にあるシュラーヴァスティー像，燃燈仏像，焔肩仏像の写真が見られるが，いずれも両肩に火炎を燃え上らせている。

カニシカ王伝説で，竜王が小僧に殺され，その小僧が竜になるが，カニシカ王に征服される。竜退治は仏教的潤色を受けているが，王権の移転の典型的物語である。カニシカ王の両肩には仏伝の燃燈仏の形式と同じような火炎が燃え上がる。イラン神話では竜王ザッハークの両肩に蛇が止まっていた。竜自体が祖霊の表象で，その肩の蛇も祖霊の表象である。ファリードゥーンはザッハークを征服して祖霊の持つエネルギーを身につけ王になる。ファリードゥーンは幼少時，多色のまだらの牝牛ビルマーヤに育てられる。ザッハークはこのことを聞きビルマーヤを襲って殺したが，ファリードゥーンは難を逃れた。まだらの牛は「物」といわれた牛で，エジプトの聖牛アピスもその 1 つであった。何十年に 1 回この世に出現する奇蹟の牛で，王権の更新に貢献した。アピスは国家あるいは王家の祖

先獣で，王と国民に再生のエネルギーを付与した。

正統派のユダヤ人を中心に，朝の祈りのおり，彼らは袋からタッリトという祈り用の肩掛けを取り出す。祈りの前に肩掛けを両手で捧げ祈りを始める。祈りが休止すると肩掛けの両端についた房にキスし，再び祈りを始める。タッリトは男性既婚者のみが使用する。祈りが終わるとタッリトを肩に掛ける。タッリトは祈りのときにしか用いないが，子供から大人まで，あらゆる男性によって常時下着のシャツと上着のブラウスの間に着用するツィツィトという小型のタッリトがある。風呂敷半分ほどの白い長方形の布の中央に首を入れる穴を開け，布の4隅に複数の青いひもがついている。本来この4隅についたひもがツィツィトと呼ばれるものである。男性は埋葬されるとき，肩にタッリトを掛ける。そのとき，房のひもを損じることは許されない（B. グリーンバーグ『ユダヤ人の伝統的家庭生活』ニュー・ヨーク，1983年，189－93頁，他）。

肩に掛けるタッリトの両がわについた多くのひもは祖先の霊の表象であった。祈りのとき，両肩に祖霊が乗ると考えられた。埋葬のときも祖霊の庇護の下にあった。タッリトは既婚男性のみが用いる。このことは，祖霊が男系子孫に伝えられることを意味する。一方，ユダヤ人はユダヤ教徒の女性から生まれた者だけに限るという女系性の原理がある。今後の考察の対象にしたい。因みに肩掛けを表わす英語のショールはペルシア語シャールに由来する。シャールはショールとして英語から日本語に入り女性の和服の肩掛けを指した。ペルシア語シャールは棺架に載せられた遺体に掛ける肩掛けの意味もあった。この点，ユダヤ教徒のタッリトと似ている。発生的にはペルシアの肩掛けは宗教的なもので，布には死者や祖先の霊魂が滲み込んでいると考えられた。ペルシア語シャールは腰帯として使用された。腰と領は「こし」と「くび」で，人体でもっとも大切な所と考えられ，そこに宿る生命力は祖先を祭ることで得られるとされたのであろう。

カトリック教皇，枢機卿，大司教，司祭らの祭服には西方教会，東方教会にわたって肩衣とそれに関連するものがある。一般の肩衣アミクトゥスは長さ85センチ，幅65センチの亜麻布で首と肩に当てる。教皇はこの肩衣の上に，直径90センチ，真ん中に首を通す穴の開いた白絹のファノネを着用する。足許にまで達する白衣を長さ3－4メートルの白色のひもで巻く。この上にカズラという上着を着用する。その他に，長さ1－2.5メートル，幅10センチほどの腕帛（わんきん）や頸垂帯（けいすいたい）がある。長さ70センチ，幅7センチのパリウムという首にかける輪状の帯もある（『カトリック大辞典』Ⅱ，冨山房，1942年，353－7頁，原色解説図）。これらの象徴的衣装はカトリックの教義的解釈がつけられている。一神教となったユダヤ教と同じに，現在は木綿，絹，羊毛，化繊が用いられるが，宗教史的に見れば発生時は祖先獣の生ま皮であった。そこには人間の無数の霊魂が集合的に内在し単体として扱われた。ユダヤ教もカトリックも貫頭衣を用いる。これは上古の人面獣を表現した名残りと考えられる。中国皇帝が袍の背中につけた五爪の竜を刺繍した補子や背中に紋所を染め抜いた日本の紋付きもみな同じ発想である。

カトリックの肩衣や帯類の房の1本1本のひもは祖霊の表象であったと考えられる。ローマ教会の腕帛は，手首に垂らす帯であるが，他の帯と同様に両端に房をつける。臂力

や腕力には当人本来の力以外の祖霊の力がある。ユダヤ人は朝の祈りでタッリトを着用したとき，黒いひものついたうるしで固めた四角い小さい箱を右腕と前頭部に結ぶ。箱の中には「出エジプト記」からの２章句と「申命記」からの２章句が書かれた羊皮紙が密封されている。４つの章句の１つである「申命記」6.4 － 9 には「これをしるしとして自分の手に結び，覚えとして額につけ，汝の家の戸口の柱にも門にも書き記せ」とある。入り口の右がわの門柱の目の高さの所に３センチ×７センチほどのメズーザー（門柱）というガラス・ケースが取り付けてある。中に「申命記」の２つの章句と全能者を意味するシャッダイの文字のある羊皮紙が入っている。ユダヤ教徒は家に出入りするたびにこのメズーザーに指を当てる。群行して境界である戸口に来訪する祖霊の単体化したものが発生時のシャッダイであったであろう。ユダヤ人は常時シャッダイを額と手に感じ取ったのである。前引のサムソンは前頭部の毛髪を剃られて力を失った。

原始仏教の修行者は，死体を遺棄した葬地で修行した。そのとき，何人かの死者が身につけた屍衣から霊能がありそうな部分を切り取り，それらをいわゆる袈裟形に縫い合わせて法衣をつくった。これが袈裟の起源で，漢訳仏典の儀法について解説したことがある（『死と再生』人文書院，1982 年）。袈裟の原語は梵語で，壊色（えしき），雑色の意で，死体が身につけていた汚物で汚れた糞掃衣（ふんぞうえ）からできた法衣の原初の姿であった。これを衲衣（のうえ）という。後世になるほど金糸を用いたりして華麗になる。袈裟は６枚あるいはそれ以上の布を縫い合わせた長方形の肩掛けで，法服の上に左肩から右脇に向かっていわゆる袈裟掛けにする。袈裟の中には死者の霊魂が宿るのである。法会（ほうえ）に際してこれを肩に掛けるのは祖霊を身に着けるためである。宗派によって袈裟の形式は異なるが，磨紫金袈裟と呼ばれる幅６センチ，長さ70センチほどの袈裟は僧侶自らも法服を着用したとき首に掛けてひもで結ぶし，在家の信徒も参拝のときは袋から取り出して平服のまま首に掛ける。ユダヤ教もキリスト教も仏教もそれぞれ独自の形式に発展したが，肩に祖霊を呼ぶことでは一致している。因みに仏教徒が首に掛けるひものついた紫色の帯である袈裟は，「魏志」倭人伝に出る持衰の「衰」の中に見られる。『字統』の衰の字の解説によると，『説文解字』の挙げる甲骨文は衣と仏教の磨紫金袈裟と同類のものから合成されている。首から垂れた左右の細布にはいくつかのひもや房がついている。白川はこの字は死者の襟もとで麻の組みひもを加える呪飾としており，麻の組みひもは穢れを祓う意があるとする（485 頁）。ユダヤ教や仏教おそらくは他の宗教においても，死者はタッリトや袈裟を肩に掛け死者の国に赴いたであろう。持衰は生きた人物であったが，いつでも死の国に赴く用意ができていた。

オホナムヂ（大国主）の神は兄弟の八十神（やそかみ）たちから迫害を受けたので，オホヤビコの神はオホナムヂに根の国のスサノヲの命を訪ねさせる。スサノヲの所にゆくと，娘のスセリビメの命が出てきて一目見て結婚してしまった。スサノヲはオホナムヂを蛇の室（むろ）に寝させた。スセリビメは蛇の領巾（ひれ）（比礼）を夫に渡し，これを３度振れば蛇は咬まないと教える。翌日は蜈蚣（むかで）と蜂の室に泊められたが，蜈蚣と蜂の領巾で無事そこから出ることができた（『古事記』）。領巾は首に掛ける布のことである。スサノヲの娘が夫に手渡した一種の呪宝で難を逃れたとある。これだけを見る限り，災いを祓う呪具にしか思われない。領巾はス

サノヲの兄のニギハヤヒの尊が天降るとき，天神御祖（あまつかみのみおや）が授けた天璽瑞宝（あまつしるしのみずのたから）10種の中に見られる。それは八握剣（やつかのつるぎ），生玉（いくたま），足玉（たるたま），死反玉（しにがえしのたま），道反玉（みちかえしのたま），蛇比礼（へみのひれ），蜂比礼，品物比礼（くさぐさのひれ）の十種であった（大野七三編『先代旧事本紀』巻第3，新人物往来社，1989年。松前健『日本の神々』中公新書，1984年，128頁）。

これら十種の瑞宝は三種の神器成立以前に天照大神から授与された神宝であった。ここには剣と玉と領巾はあるが鏡はない。刀剣は多くの霊魂を宿す物であり，玉はタマシイの原点で再生，不死のための呪具であり，道反とは各種辞書が解説するように，幽鬼（チ）をはね返す呪具であろう。幽というのは天上から見た地上のことで，幽鬼は地上の王権をうかがう悪鬼のことである。問題の比礼（領巾）もあの世の（女）王が授与する呪宝であり土産物であった。木綿のような布類以前は獣皮で，祖先獣の魂が込められていた。ニギハヤヒが地上にもたらした領巾は蛇と蜂その他種々の生き物の領巾があった。蛇に対しては蛇比礼を振ると蛇は鎮まり，蜂に対しては蜂比礼を振った。蛇や蜂その他はトーテムと考えられ，その霊魂が内在する布を肩に掛けるとそれらの生き物に襲撃されることがない。十種の宝は全て霊魂に関係のある呪具で，同じく霊魂に関係のある呪具である三種の神器とは異なった文化に属するものである。スサノヲの命は領巾の文化を背景にすると同時に，八岐大蛇退治によって後世の草薙の剣を手に入れている。竜殺し伝説は古い王殺しの説話化であるので，スサノヲは同族あるいは異族の王を殺害して王のエネルギー，王権の象徴としての剣を手に入れたことがわかる。ニギハヤヒの十種の呪宝は，大別すると剣と玉と領巾になる。三種の神器も霊魂に関係のある神体であるが，前者に較べると抽象度は高く洗練されている。この点から見てもニギハヤヒの呪宝の方が古い。

ヘロドトスは次のような話を伝えている。エジプト王ランプシニトス（エジプトのラムセス王のこと，数人いるが恐らくはラムセス2世）は冥界へ生きたまま下り，そこでデメテルと骰子（さい）を争い，女神から土産に黄金の手巾をもらい地上に帰ってきた（『歴史』2.122）。『新約聖書』「マタイ伝」はいう。イエスがゴルゴタの丘で十字架につけられたとき，兵士らはくじを引いてイエスの服の部分部分を分け合い，そこに座って見張りをしていた（27.35－7）。イエスはユダヤの総督ピラトによって他の罪人といっしょに処刑されたが，兵士らは彼の血で汚れた着衣の切れはしを熱望した。十字架から聖母マリアによって下ろされた彼の遺体から兵士らはマリアから布切れを授与された。イエスの屍衣にはイエスの霊魂が染み込んでいた。マリアは『先代旧事本紀』の御祖（みおや）や天照大神に，さらにはギリシアのデメテル（エジプトのイシス）女神に相当し，発生的には祖霊の染み込んだ豊穣の布を授与する女神であった。中国で葬儀での埋葬のあと帰りに利布という布をもらう。この布は本来は屍衣の一片で，地母神から授かる豊穣の布であった。エジプト王ラムセスが地母神デメテル（日本の天照大神に当たる）からもらった黄金の手巾とおなじものである。日本では葬儀でハンケチをもらうのがこれで，現在は郵便ハガキに代わっている。中陰明けに配るタオル，シーツ，毛布の類も同類である。

以上総合的人間学の見方で有翼円盤と有翼人面牡牛像の1部を概観した。古代西アジアの人面獣身像と中国の『山海経』の世界については稿を改めたい。　（2005．9．15受理）